

【論 文】

明治前期における「Reformation」観

永 本 哲 也

はじめに

本稿の目的は、明治前期の日本において、「Reformation」がどのように理解されていたかの一端を明らかにすることである。

「Reformation」は、ヨーロッパにおいて概ね16世紀に起こったプロテスタントによるキリスト教、さらにはそれに付随する社会の諸領域の改革を指す概念である。これは、日本では「宗教改革」と訳されてきた。

しかし、21世紀に入ってからのおよそ四半世紀で、「Reformation」の理解、そしてそれを言い表す概念は劇的に変化した¹。「Reformation」はマイノリティやカトリックを含む多様な改革だと見なされるようになり、「Reformations」という複数形で呼ばれることが増えた。16世紀を超えた長期的な出来事だと理解されるようになり、「Long Reformation」という表現も登場したし、ヨーロッパに限定されないグローバルな運動という側面にも目が向けられ、「Global Reformation(s)」という概念も使われるようになった。

概念の見直しは日本語でも進行している。踊共二は、「宗教改革」という訳語は、現在では複数の異なる宗教を念頭に置いた大規模な改革という意味にも取れるが、近世プロテスタント宗教改革の担い手にはそのような意図はなかったため、「近世ヨーロッパのキリスト教諸改革」と呼ぶ方が妥当ではないかという問題提起を行った²。また、今野元は、近世カトリックの改革を表すときに、「対抗宗教改革」ではなく、「カトリック改革」と「反宗教改革」を併用することを提唱した³。

¹ 近年の研究動向についての記述は、以下を参照。永本哲也「拡散と収束—複数形、長期、グローバルな観点による宗教改革像の黎明」『歴史学研究』975、2018年10月号、18-26頁。国際的な宗教改革研究の団体である宗教改革史協会（Verein für Reformationsgeschichte）が刊行した以下の論文集でも、概念の問題が大きく取り上げられている。Kaspar von Greyerz und Anselm Schubert（Hg.）, *Reformation und Reformationen / Kontinuitäten, Indentitäten, Narrative*, Heidelberg, 2022.

² 踊共二「宗教改革の概念史—原語と日本語訳」『武蔵大学人文学会雑誌』55（2）、2024年3月、426（1）-404（23）頁。踊はこれ以前にも、同様の提唱を行っている。踊共二「創られたドイツ宗教改革—現代史的考察—」『武蔵大学人文学会雑誌』50（1）、2018年12月、29頁；踊共二「宗教改革とカトリック改革」木畑洋一、安村直己責任編集『岩波講座世界歴史15 主権国家と革命15～18世紀』岩波書店、2023年、97頁。

³ 今野元「Gegenreformationは「対抗宗教改革」か—西洋近世史研究におけるドイツ語解釈を巡って—」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』23、2022年、39-60頁。

目下のところ海外であれ日本であれ「Reformation」をどう理解するか、どのような概念を用いて表現するかについては、専門家の間でも意見の一致は見られず、多数の「Reformation」像と概念が、必ずしも互いに競合しないまま併存しているという状況にある⁴。

このような研究状況の中で、現在進んでいるのが、日本における「Reformation」を学説史的、概念史的に検討しようという動きである。学説史的研究は近年まで、ルターやカルヴァン研究、邦語文献一覧、事典などで断片的にしか行われてこなかった⁵。しかし、2015年に踊共二が、日本でのルター生誕や宗教改革400年記念集会など明治期を中心に日本の宗教改革史研究を回顧する研究を公表し⁶、さらに、2023年に近世日本人のプロテスタント観を扱った論文を刊行したことで進展しつつある⁷。概念史的研究は近年まで行われてこなかったが、2023年に永本哲也による訳語「宗教改革」の確立過程に関する研究、2024年に踊による西洋・日本を含めた包括的な概念史研究が刊行されることで、ようやく始まった⁸。しかし、学説史、概念史的研究ともに、通史的な理解が得られる段階には至っていない。

「宗教改革」概念の由来を検証した最初の研究は、前述の永本による論文である⁹。永本はの中で、「Reformation」の訳語は当初は多様だったが、主要なものは「religion」の訳語であったこと、「religion」の訳語が「宗教」に標準化されたあとの時期、1880年代に「宗教改革」が主流になり、90年代に支配的な地位を確立したことを明らかにした。そして、当時の日本では「宗教」は、「ピリーフ」つまり教義体系を持つものであり、その代表はプロテスタントだと理解されていたため、「宗教改革」は当初キリスト教、特にプロテスタントによる教義体系の改革という意味で用いられていた可能性が高いと結論づけた。

ただし、この研究の結論には大きな問題が残っている。というのは、「宗教改革」の意味を論証する際に、「Reformation」「religion」の訳語の含意のみを論拠にしており、訳語成立期に書かれた

⁴ 永本哲也「広がっていく宗教改革「像」 その複雑さに迫ろうとする試み」『UP』東京大学出版会、2017年12月号、1-4頁。この状況は、現在でも基本的に変わっていないと、筆者は考えている。

⁵ 徳善義和「日本におけるルター研究」『日本の神学』6、1967年、75-81頁；徳善義和「日本におけるルター研究—1967年以後—」『神学雑誌』10、1977年、71-84頁；徳善義和「日本におけるルター研究—1977年以降—」『日本の神学』22、1983年、181-187頁；小平尚道「日本におけるカルヴィン研究—植村、内村、高倉を中心として—」『日本の神学』3、1964年、56-61頁；渡辺信夫「日本におけるカルヴァン研究」『日本の神学』7、1968年、73-78頁；久米あつみ「日本におけるカルヴァン——高倉徳太郎の場合——」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』35、1974年、20-31頁；俊野文雄編「邦語文献」徳善義和他編訳『宗教改革著作集15 教会規定・年表・地図・参考文献目録』教文館、1998年、95-310頁；出村彰「宗教改革」日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、647-648頁。

⁶ 踊共二「日本の宗教改革史研究—過去・現在・未来—」『史苑』76(1)、2015年、152-169頁。

⁷ 踊共二「近世日本人のプロテスタント認識—禁教時代の危険な東西交流—」『武蔵大学人文学会雑誌』54(2)、2023年3月、47-93頁。

⁸ 永本哲也「「Reformation」の訳語「宗教改革」の確立過程とその含意」『キリスト教史学』77、2023年、101-116頁；踊「宗教改革の概念史」。

⁹ 永本「「Reformation」の訳語「宗教改革」、101-116頁。

著作で、「Reformation」がどのように語られていたかの検討を行っていないためである。そのため、上記の仮説が、実際に当時の著作に見られる「Reformation」観と合致しているかどうかの検証が必要となる。そのため本稿は、「宗教改革」という訳語が支配的になる前の時期、つまり1880年代末までの明治前期（1-22年）に刊行された著作に現れる「Reformation」についての記述を検証することで、当時の日本における「Reformation」観を明らかにすることを目的とする。

「宗教改革」という訳語が「宗教」を含んでいるからには、検証の際に「Reformation」と「religion」という2つの概念の関連性に着目することが依然として重要である。本稿では、両概念の関係を分析する際に、以下の二点に特に着目する。一点目は、「Reformation」が「ビリーフ」の改革だと理解されていたかどうかを検証することである。踊は、上記の永本の説に対し、欧米列強は日本に宗教的「プラクティス」の権利を要求していたことを指摘し、西洋のキリスト教を「ビリーフ」中心とみなす観点に疑問を呈した。そして、当時の日本の知識人がそうした「プラクティス」の要求に無頓着であったとは思えないと批判を行っている¹⁰。明治期日本で「宗教」概念が、「ビリーフ中心主義」的に理解されていたという見方は、磯前順一によって紹介され、日本の宗教史において大きな影響力を持っているが、踊の批判は、その再検討を求めるものでもある¹¹。そこで本稿では、「ビリーフ」「プラクティス」の両側面が、明治期の著作の「Reformation」に関する記述に、どのように現れているかに着目する。二点目は、「religion」と「文明」の結びつきである。踊は、明治期にプロテスタントの宗教改革は、「啓蒙」と「進歩」の文脈で理解されていたと指摘している。踊は、福澤諭吉の『文明論之概略』の記述を論拠として挙げたが、福澤は「宗教改革」を「文明」とも密接に結びつけていた¹²。さらに、次章で見るように、「文明」と結びつけられて語られたのは、「religion」も同様であった。そのため、「Reformation」と「religion」概念が、文明といかに結びついていたかについても検証を行う。

なお、本稿では「Reformation」観に軸足を置いて分析を行うが、近世におけるローマ・カトリック教会の改革が、どのような概念で呼ばれていたか、どう理解されていたかについても可能な範囲で追いかける。

本稿では、明治期に刊行された様々な文献を扱うが、特に註記がない場合、日本語文献については国立国会図書館デジタルコレクション、翻訳元となった洋書についてはGoogle BooksもしくはInternet Archive を利用した¹³。また、この時期は、「religion」「Reformation」ともに訳語が入り交じっていたため、混乱を避けるため基本的に原語で表記し、具体的な訳語は、個々の著作に関する記述でのみ用いることにする。さらに、人名や用語が現在の表記と大きく異なっている場合があるため、読者の理解に必要な場合には（ ）で適宜補足説明を行う。

¹⁰ 踊「宗教改革の概念史」415-414頁。

¹¹ 磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜——宗教・国家・神道——』岩波書店、2003年、12-13、34-37頁。

¹² 踊「宗教改革の概念史」417頁。

¹³ <https://dl.ndl.go.jp/>; <https://books.google.co.jp/>; <https://archive.org/>（2024年11月13日閲覧）

第1章 明治期日本の「religion」理解

「Reformation」の訳語「宗教改革」には、「religion」の訳語「宗教」が含まれている。そのため、「宗教改革」が、明治期の知識人によってどのように理解されていたのかを知るためには、当時広まっていた「宗教」概念の内実を理解する必要がある。本章では、明治期の宗教改革に関する言説を検証する前提として、明治期日本での「religion」理解を概観する。

第1節 西洋由来の「religion」概念

「宗教」は、西洋からの外来語「religion」の訳語として成立した概念である。そして、宗教学研究では、西洋で生まれた「religion」概念は、元来これに相当する概念を持たなかった日本を含む他地域で受容されていったことが指摘されている¹⁴。そのため、西洋で生み出され、日本に伝えられた「religion」概念は、どのようなものだったかを最初に確認しておく。

ウィルフレッド・キャントウェル・スミスによれば、現在のわれわれが用いるような意味で「religion」が使われるようになったのは、17～19世紀にかけての西洋、特にプロテスタントの間であった。「religio」というラテン語は古代からキリスト教の文書で使われていたが、古代では「礼拝や儀礼の仕方」、中世の西洋では「修道生活」や「礼拝」という意味で使われることが多かったという¹⁵。15世紀末のルネサンス期にはマルシリオ・フィチーノが、16世紀の宗教改革の時期にはツヴィングリやカルヴァンが、「religio」を、「人格的で内的な、そしてまた超越的なものへと方向づけられたあるもの」という「敬虔さ〔piety〕」に近い意味で使うようになった¹⁶。

16世紀には「religio」が内的な敬虔さを表すのに使われていたが、17世紀から18世紀にかけて、「図式的に外在化された概念」、つまり「ある一つの体系として想定される諸々の信念や実践の体系」を指すように変化した¹⁷。この変化は、一方では、「諸々の事柄に対して主知主義的で非人格的な図式を作り上げること」に力点を置く啓蒙主義的な世界観に起因した。これにより、「religion」は、真か偽かを主知主義的に判断できる対象だと理解されるようになった¹⁸。他方では、「religion」の外在化は、この時代に起こった論争と衝突によっても促進された。論争で他者の「religion」を拒絶する場合には、「観察可能な諸々のものの抽象的で非人格的な様式」、つまり「諸々の信念や儀礼の体系」として概念化しなければならなかったためである¹⁹。こうして、「religions」という複数形が、さらにはすべての体系ないし諸信念の体系の総和を意味する総称的な意味での「religion」とい

¹⁴ 杉本良男「アジア・アフリカの翻訳」池上良正他編『岩波講座宗教1 宗教とはなにか』岩波書店、2003年、55-83頁。

¹⁵ ウィルフレッド・キャントウェル・スミス著、保呂篤彦、山田庄太郎訳『宗教の意味と終極』国書刊行会、2021年、45-56頁。

¹⁶ 同書、57-63頁

¹⁷ 同書、65、72頁。

¹⁸ 同書、66-67頁。

¹⁹ 同書、70-71頁。

う概念が生じたという²⁰。

スミスは、こうした歴史的通観を総括して、私たちはこの発展を引き継ぐ者として一般に「religion」の語を四つの明確に異なる意味で用いていると結論づけた。一つ目が、「人格的な敬虔さ」という意味である。この意味は、人間の生活における宗教を、無関心・反抗心から区別する。二つ目と三つ目は、「信念であれ、実践であれ、価値観であれ、そうしたものから成る顕在的な体系を指す用法」である。この体系は、「理念的なものとしての体系」、「経験的な現象としての体系、つまり歴史的で社会的な現象としての体系」という二つの対照的な意味を持つ。つまり「キリスト教」にも、理念的な「真のキリスト教」と、歴史の中のキリスト教があることになる。この二つの意味は、一つの宗教を他の宗教から区別する。四つ目は「総称的な意味での宗教」、つまり、すべての「the religions」をひとまとめにしたような複雑なものである²¹。

注目すべきなのは、スミスが、こうした意味での「religion」は、主にプロテスタントの間で使われており、カトリックはこうした「religion」概念の発展をそれほど共有していなかったという印象を持っていると述べていることである²²。また、スミスは、この発展には、啓蒙主義的なものの見方が背景にあったとも指摘していた²³。つまり、「religion」概念には、その発展過程で、プロテスタントや啓蒙主義的な世界観が埋め込まれていたことになる。

このことは、「religion」概念が、「プラクティス」よりも「ビリーフ」を重視する価値基準を内在しているという指摘とも整合的である。磯前順一は、ウィンストン・キングの論を参照しながら、プロテスタンティズムを中心とする近代の西洋社会では、明確な教義のかたちをとるビリーフが重視される一方、非言語的な儀礼行為を主とするプラクティスはそれに従う副次的なものだと考えられたため、明確な教義体系を持たない非西洋社会の諸宗教は、劣等な宗教とみなされたと指摘した²⁴。ただし、前述のように、踊はこうした見方には批判的であり、少なくとも日本に受容される際に、どの程度ビリーフ中心主義的に「religion」が理解されたかどうかは、再検討する必要がある。

スミスによる「religion」の4つの意味が、日本に伝えられた「religion」といかに合致しているかを確認するために、ウェブスター辞書における「religion」の意味を見る。ウェブスター辞書は、アメリカ人のノア・ウェブスターが編纂し、後継者によって改訂された一連の辞書である。早川勇によれば、ウェブスター辞書は、幕末から明治期に英語を学んだ日本の知識人によって広く利用されていた²⁵。この時期の日本の「religion」理解の形成にも、少なからず影響を及ぼしていると考えられるため、『ウェブスター大辞典』における「religion」の意味を確認する²⁶。この辞書には、以下の三

²⁰ 同書、71頁。

²¹ 同書、77-79頁。

²² 同書、69頁。

²³ 同書、67頁。

²⁴ 磯前、12-13頁。

²⁵ 早川勇『ウェブスター辞書と明治の知識人』春風社、2007年。

²⁶ Noah Webster, thoroughly revised, and greatly enlarged and improved, by Chauncey A. Goodrich and Noah

つの意味が掲載されている。

1. The recognition of God as an object of worship, love, and obedience; right feelings toward God as rightly apprehended; piety. (礼拝、敬愛、従順の対象として神を理解すること；正しく理解して神に向ける正しい感情；敬虔)
2. Any system of faith and worship; as, the religion of the Turks, of Hindoos, of Christians; true and false religion. (あらゆる信仰と礼拝の体系；トルコ人、ヒンドゥー教徒、キリスト教徒の宗教のような；真の、そして偽の宗教)
3. The rites or services of religion; chiefly in the plural. [Rare.] (宗教の儀式あるいは礼拝；主に複数形で「稀」)²⁷

スミスが挙げた「religion」の4つの意味との対応を見ると、『ウェブスター大辞典』の1.の意味は、スミスが挙げた一つ目、2. は二つ目と三つ目、四つ目に概ね該当している。3. の意味は、1. や 2. よりも古い用法であろう²⁸。そのため、稀だつという注釈がつけられている。この定義を見ると、「religion」は、「ビリーフ」「プラクティス」両面を備えたものとして理解されていたと受け取れる。

ここから、「religion」は日本においても、個人の敬虔さ、「キリスト教」「イスラム教」「仏教」などの個々の「信仰と礼拝の体系」、さらに全ての「religions」を全て合わせた総称として理解されていたと想定できる。

第2節 日本における「religion」概念の受容

日本に「religion」概念が入ってきたのは幕末であり、当初併存していた多数の訳語が「宗教」に標準化されたのは概ね1880年代半ばまでの時期であった²⁹。そのため、日本において次第に「religion」概念が知られるようになり、その理解が固まっていく時期だと位置づけられる。先行研究で指摘されているのは、この後見るように、未だ「religion」理解が明確になっていなかったこの時期には、「religion」は、文明や学術など、「religion」以外の概念と密接に結びつけられて語られていたことである。

「religion」に関連付けられた概念の代表は「文明」である。「religion」概念は西洋に由来し、西洋

Porter, *An American Dictionary of the English Language*, Springfield, 1865. ここで参照するのは、1864年にグッドリッチやポーターによって改訂された版である。

²⁷ Ibid., p. 1113.

²⁸ スミスによれば、古代や中世には、「religio」は、礼拝や儀式、その仕方という意味でも使われていた。スミス、49-56頁。

²⁹ 磯前、36頁；オリオン・クラウタウ「宗教概念と日本——Religionとの出会いと土着思想の再編成」島蘭進、高杢利彦、林淳、若尾政希編『シリーズ日本人と宗教——近世から近代へ 第2巻 神・儒・仏の時代』春秋社、2014年、257-258頁。

で支配的な「religion」はキリスト教であった。そして、当時の世界で文明的な国は、西洋だと考えられていた。そのため、西洋の「religion」であるキリスト教、特にプロテスタントこそが、西洋の文明化を引き起こした原動力であるという理解が広まった。

こうした理解は、先ず西洋諸国の事情を知るところから生じた。1871（明治4）年に維新政府によって派遣された岩倉使節団は、1873（明治6）年9月まで欧米諸国を巡歴し、視察を行った。山崎渾子は、使節団が視察の過程で宗教について以下の三点を学んだと指摘する。一点目は、「富国強兵のために宗教は政治的社会的器機として有効であったこと」、二点目は「「古い」宗教から「新しい」宗教へと単に文明の発達段階との関係のうちにとらえた楽観論から、文明国にふさわしいのはプロテスタントであるという見方」、三点目は「キリスト教は西洋文明を推進していくところの精神的情熱やエネルギー的役割を果たした」ことである³⁰。使節団は、実際に欧米諸国に行き、制度を調査し、様々な人々と話をする中で、西洋諸国におけるキリスト教の重要性を認識するようになった。その際、使節団の人々が接触する西洋人にはプロテスタントが多かったこともあり³¹、プロテスタントこそが西洋文明を推進するものだと考えるようになった。ただし、山崎によれば、彼らは、教会史的な記述においてキリスト教の内容・教義などについてはほとんど追求しておらず、カトリック教会よりもプロテスタントをより高く評価する際に、教義内容を問わず、「新旧」を基準にしていたという³²。つまり、彼らは、教義や儀礼ではなく、文明進歩への貢献に注目して「religion」を理解していたことになる。

西洋文明の基盤にキリスト教があるならば、日本を西洋のように文明化するためには、キリスト教を受け入れることが必要だという考えも登場することになった。福澤諭吉や西周などの啓蒙思想家たちが集う明六社の一員であった津田真道は、1873（明治6）年『明六雑誌』に、「開化を進る方法を論ず」という論考を掲載した。この中で津田は、「religion」を「法教」と訳し、その目的を「不開化の民を導きて善道を進ましむるにあり」とした。そして、「法教」は数多くあるが最善はキリスト教である、さらに「希臘（ギリシア正教）」、「天主（カトリック）」、「異宗（プロテスタント）」というキリスト教三種の中で、プロテスタントを、「自由を主としてもっとも文明の説に近しという」理由で最善だと評価した。そして、日本で開化を進めるために、最も新しく、善で、自由、文明の説に近いプロテスタントの教えを説かせ、人民を教導させるべきだと提唱した³³。また、明六社の一員であり、1874（明治7）年に洗礼を受け東京メソジスト教会の信徒となった中村正直は、1875（明治8）年の「人民の性質を改造する説」で、旧態依然としている人民の性質を改造するためには、

³⁰ 山崎渾子『岩倉使節団における宗教問題』思文閣出版、2006年、139頁。

³¹ 山崎、123-125、141-143頁。また、使節団随行員であった久米邦武は使節団の報告書『米欧回覧実記』で、カトリック、ギリシア正教、ロシア正教に対し相対的に冷ややかなまなざしを向けていたと、桂島宣弘は指摘している。桂島宣弘「宗教が宗教になるとき—啓蒙と宗教の近代」島蘭進、末木文美士、大谷栄一、西村明編『近代日本宗教史第一巻 維新の衝撃 幕末～明治前期』春秋社、2020年、112頁。

³² 山崎、93-95頁。

³³ 津田真道「開化を進る方法を論ず」山室信一、中野目徹校注『明六雑誌 上』岩波書店、1999年、117-121頁。

政体を変えるだけでなく、芸術と並んで「教法」によって感化する必要があると主張した。そして人民の性質を改造するのに適当な「religion」を、「西国の教法」、つまりキリスト教だと見なした³⁴。

他方で、19世紀の西洋では、既に知識人の間でキリスト教を批判する考え方も存在した。磯前によれば、日本でこうしたキリスト教批判が輸入され広まる重要な契機となったのは、1877（明治10）年に東京帝国大学でエドワード・モースが進化論を講義し、キリスト教の創造説が科学的事実に合致しないと批判したことにあった³⁵。ゴダールによれば、モースは来日前にアメリカ国内で進化論に対する反論と戦っており、日本での進化論講義も、在日宣教師を含むキリスト教への全面的な攻撃であった³⁶。さらに、モースがアメリカから東京に招いたアーネスト・フェノロサもまた、社会進化論を扱う公開講座で、キリスト教は、特別な種の創造を説くだけでなく、彼らの人類に対する見方からしても、進化論とは相容れないと主張し、キリスト教を強く批判したという³⁷。西洋から日本に導入された進化論に基づくキリスト教批判は、加藤弘之や外山正一、石川千代松など日本の知識人にも影響を及ぼした³⁸。

こうしたキリスト教批判に対して、キリスト教側からは、キリスト教と文明・学術は一致するという再批判が行われた。そしてその際、西洋文明の基盤となっているキリスト教は、文明的ではない他の「religion」とは異なる、真の「religion」もしくはより優れた「religion」であるという主張が付随した。こうした見方は、アメリカのプロテスタントによって日本に持ち込まれた³⁹。ゴダールによれば、カナダ人宣教師のチャールズ・サミュエル・イビーが、1883年の連続講義で、キリスト教の本性は進歩と科学の中に表出されており、もし日本が文明に参入したいのであれば、キリスト教を受け入れる以外の選択肢はないと訴えかけたという。その際、イビーは、進化論はまだ証明されておらず、進化論者たちの議論にも不備があると、進化論に対する再批判を行っていた⁴⁰。

星野靖二によれば、アメリカのアマースト大学の学長であったJ. H. シーリーの著作の抄訳である『宗教要論』1881（明治14）年では、物質的な進歩、知識や道徳といった精神的な進歩ではなく、人間に主体的に善を行わせ、それによって人間を幸福にする「宗教」こそが、文明の目的だと位置づけられていた。そして、シーリーは、神から与えられた「宗教」であり、現世的力による迫害を受け、他教と混交せず純粹さを保ってきたキリスト教を、人間がつくり出し、現世的な力と結びつ

³⁴ 中村正直「人民の性質を改造する説」山室信一、中野目徹校注『明六雑誌 下』岩波書店、2009年、66-69頁。
中村の宗教観全般については、以下を参照。小泉仰「啓蒙思想家の宗教観」比較思想史研究会編著『明治思想家の宗教観』大蔵出版株式会社、1975年、72-90頁。

³⁵ 磯前、45頁。

³⁶ クリントン・ゴダール著、碧海寿広訳『ダーウィン、仏教、神 近代日本の進化論と宗教』人文書院、2020年、45-47頁。

³⁷ 同書、51-52頁。

³⁸ 同書、45-49頁。

³⁹ 山口輝臣『明治国家と宗教』東京大学出版会、1999年、35-36頁；星野靖二『近代日本の宗教概念 宗教者の言葉と近代』有志舎、2012年、31-37、94-101頁。

⁴⁰ ゴダール、59頁。

き、迷信習俗と混合したほかの「宗教」と対比し、「宗教」として望ましい属性を備えたキリスト教のみが、社会を文明に導くとした⁴¹。この著作を翻訳したのは組合教会の牧師である小崎弘道であったし、シーラーは新島襄の師であり、内村鑑三にも影響を及ぼしており、植村正久も読んでいたため、日本のキリスト教界である程度の影響力を持ったと、星野は評価している⁴²。

また、山口輝臣によれば、アメリカン・ボードから宣教師として日本に派遣され、同志社で教師も務めたD. C. グリーンが、1885（明治18）年の『六合雑誌』に掲載した論考で、未信者にアピールするため、以下のような論理を使ったという。彼は、キリスト教国と非キリスト教国を比較し、軍事・経済・学術・芸芸などにおいてキリスト教国が優位にあることへ注意を促し、歴史を吟味することでこれらはキリスト教の精神とともに成長したことを理解させる。そして、野蛮未開の国々に顕れるキリスト教の結果に注目させ、ついで一個人に現れたキリスト教の結果へと移っていくと⁴³。

西洋から宣教師を通じて伝えられたこの図式は、日本人のキリスト者によるキリスト教弁証論でも用いられるようになった。星野によれば、植村正久は『六合雑誌』1880（明治13）年に掲載した「宗教論」で、「宗教を求める心が人間に本来的であること、文明の進歩は宗教批判につながる可能性を持つが正しい宗教は文明と調和すること、そして正しい宗教であるキリスト教が日本に採用されるべきであること」という三つの主張を行っていた⁴⁴。植村は、『真理一斑』1884（明治17）年では、進化論は神の存在を否定し得ないし、万物の主権者たる神の存在を想定した場合により妥当なものになると、進化論に対しキリスト教を擁護した⁴⁵。さらに、小崎弘道も、『政教新論』1886（明治19）年で、欧米文明の大原因にはキリスト教があり、文明とキリスト教が不可分であるため、日本の文明化にはキリスト教が必要だと主張したという⁴⁶。

こうした西洋文明とキリスト教を結びつけて語るという語り口は、進化論に基づく批判に対する反論であるとともに、文明と合致するキリスト教とそうではない日本の他の「religion」を対比し、キリスト教の優越性を誇示するためのものでもあった。これは、当然日本におけるキリスト教の宣教を推し進めることを目的としていたが、実際に、プロテスタント教会は、西洋諸国からの批判によって1873（明治6）年にキリシタン禁制の高札が撤去されてから、日本での宣教を展開し、教勢を拡大していった⁴⁷。

文明との結びつきを根拠に優越性を主張するキリスト教に対し、同様の論理を用いて反論を行っ

⁴¹ 星野、94-101頁。

⁴² 同書、94-95頁。

⁴³ 山口、35頁。D. C. グリーンについては以下を参照。竹中正夫「D.C.グリーン研究—アメリカボードの背景と日本伝道の開始」『同志社アメリカ研究』13、1977年、16-28頁。

⁴⁴ 星野、133頁。

⁴⁵ 同書、136頁。

⁴⁶ 同書、103-104頁。

⁴⁷ 明治前期のプロテスタントによる宣教については以下を参照。黒川知文『日本史におけるキリスト教宣教 宣教活動と人物を中心に』教文館、2014年、132-156頁。

たのは仏教者であった。その代表が、真宗大谷派の住職の長男として生まれ、生涯を通じて仏教改良を目指した、明治期を代表する仏教系の知識人である井上円了である。彼は、『真理金針 初編』1886（明治19）年でキリスト教の創造説などがいかに非合理的であるかを論じ、キリスト教は進化論などの理学とは合致しないとして批判を行った⁴⁸。井上円了は、モースの影響を受けた加藤弘之が総理をつとめていた東京大学で哲学を学び、彼らから影響を受けているため⁴⁹、彼のキリスト教批判も、同様に進化論のような学術と合致しないことを論拠とするものであった。そして、理学に相反するキリスト教に対し、仏教は合致するため、仏教がキリスト教に優っていると主張した⁵⁰。このように井上は、仏教は、キリスト教よりも、学術・文明に適合していることを根拠に、キリスト教に対する仏教の優越性を主張した。これは、キリスト教徒が、他の「religion」に対しキリスト教がより優れていることを弁証するときに使った論理を裏返したものである。つまり、文明の重要な基盤となる学術と一致しているかどうか、真の、あるいは優れた「religion」の基準を成すという前提自体は、キリスト者と仏教者双方に共有されていたことになる。山口によれば、互いに自らこそが相手よりも「religion」として優越していると主張しうる語り方を持ったことで、仏教はキリスト教と対等になった。その後はキリスト教と仏教が「religion」の双璧だと見なされ、「religion」かどうかの「資格」が、キリスト教と仏教を基準に計られ、その資格を持たないものは、「religion」にあらずとされたという⁵¹。

こうして、概ね明治10年代末までには「religion」は、文明や学術と結びつくものだという理解が日本で広まり、その資格を満たすことが明らかなのは、キリスト教と仏教だと考えられるようになった。そして、「religion」としての資格がキリスト教と仏教を基準に測られるということは、それ以外の神道、儒教、民間信仰は「religion」ではない、もしくは「religion」として見なせるかどうか曖昧だと判定されることを意味した。島蘭進は、欧米では「religion」には、キリスト教やイスラーム、仏教のような「高等宗教」だけでなく、未開部族や民俗社会の「自然宗教」も含めるという用法が定着していたが、日本では「自然宗教」にあたるものを「religion」とする用法が十分に取入れられていなかったと指摘する。そして、1890年代の日本では、神道や民俗宗教は「迷信」の領域、儒教は世俗的な道德の領域に属するものであり、キリスト教や仏教などの限られた「高等宗教」のみが「宗教」だとする用法が支配的だったという⁵²。

以上のように「宗教」という訳語の成立期にあたる明治前期には、「religion」は、文明、学術と関連するかどうかで、「religion」としての資格が判定された。その際、まずはキリスト教、特にブ

⁴⁸ 笠原芳光「井上円了の排耶論」同志社大学人文科学研究所編『排耶論の研究』教文館、1989年、195-205頁。

⁴⁹ 長谷川琢哉「井上円了の「仏教改良」—その哲学的・思想的背景の考察—」『国際井上円了研究』5、2017年、222-224頁。

⁵⁰ 笠原、204-205頁。

⁵¹ 山口、47頁。

⁵² 島蘭進「日本における「宗教」概念の形成—井上哲次郎のキリスト教批判をめぐる—」山析哲雄、長田俊樹編『日本人はキリスト教をどのように受容したか』国際日本文化研究センター、1998年、72-74頁。

ロテスタント、その後はキリスト教と仏教こそが、「religion」としての資格を持つことになった。こうした見方は、「Reformation」の訳語を選択する際に、「religion」の訳語を用いることにした当時の知識人の念頭にもあったはずである。そのため、この時期広まっていた「religion」理解を踏まえながら、当時の著作に現れる「Reformation」観を検証していく。

第2章 万国史

明治前期を代表する歴史叙述の様式に、「万国史」と呼ばれるものがある。小沢栄一によれば、「万国史」という言葉は、西村茂樹が、『万国史略』というタイトルで、スコットランドの歴史家アレクサンダー・フレーザー・タイトラーの著作の翻訳を1869（明治2）年に出版したときに、はじめて書名として用いられ、その後一般に普及した⁵³。万国史の特徴は、中世以降の世界の歴史を、概ね一国史の集合として描くことにある。万国史は、学校教科書としても使われており、翻訳を含めて非常に多くの種類が出版されていた⁵⁴。そのため、明治期の人々は多くの場合、万国史の中に出てくる記述を通して、「Reformation」についての知識を得ていたと考えられる。そのため、以下、代表的な「万国史」における「Reformation」観を検証する。

第1節 1870年代の万国史

明治初期にもっと影響力が大きかった万国史の著作が、グッドリッチの*Peter Parley's Universal History*（『パーレー万国史』）である⁵⁵。この本は、岡崎勝世によれば、ボストンの出版業者グッドリッチが企画した子ども向けシリーズ「ピーター・パーレーもの」の一冊であった。このシリーズは、パーレーという名の老人が子どもたちに、歴史学、博物学、地理学などさまざまな分野について物語るというもので、アメリカでは大きな人気を博したという⁵⁶。『パーレー万国史』は、福澤諭吉やお雇い外国人のフルベッキによって日本に紹介され、文部省が尋常小学校の教科書として編纂した『史畧』1872（明治5）年、『萬國史畧』1874（明治7）年の底本にもなった⁵⁷。寺内章明編訳『五洲紀事』1871（明治4）年は、主に『パーレー万国史』を参照して書かれた万国史であったし、牧山耕平訳『巴來萬國史』1876（明治9）年を代表とする多数の翻訳書が刊行されるなど、明治前期を通

⁵³ 小沢栄一『近代日本史学史の研究 明治編—19世紀日本啓蒙史学の研究』吉川弘文館、1968年、51-53頁；岡崎勝世「日本における世界史教育の歴史（1-1）「普遍史型万国史」の時代」『埼玉大学紀要・教養学部』51（2）、2016年、23頁。

⁵⁴ 幕末から明治17年までの万国史教科書の一覧は以下を参照。木全清博「万国史教科書の内容分析（2）——明治初期の官版万国史教科書——」『滋賀大学教育研究所紀要』23、1989年、18-19頁。明治19から26年に刊行された万国史教科書は以下を参照。岡崎勝世「日本における世界史教育の歴史（1-2）「文明史型万国史」の時代1」『埼玉大学紀要・教養学部』52（1）、2016年、3頁。

⁵⁵ Samuel G. Goodrich, *Peter Parley's Universal History, on the Basis of Geography*, London, 1837.

⁵⁶ 岡崎「日本における世界史教育の歴史（1-1）」33頁。

⁵⁷ 同論文、22-23、29-33頁。

じて良く読まれた著作であった⁵⁸。

『パーレー万国史』は、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニアの歴史を一冊で概観する著作であるため、「Reformation」についての記述は、かなり限られている。その中で最もまとまった記述は、ローマ教皇統治下のローマを扱った92章にある⁵⁹。ここでは、「羅馬法皇」は、古今彼に匹敵する「暴虐不道ノ君」はいないと糾弾されている。何故なら「人ヲ惑ハシ神明ヲ凌キ誣フレハナリ」だからという。そして、世俗の君主を越えるような権勢を振るっていたが、これが「Reformation」で終わったとする。

然レドモ千五百十八年に當リテマルラインリュセルト云フ人始メテ宗門改革ノ説ヲ唱ヘ法皇ノ威權ヲ抵排シテ説法セシカハ之カ爲メニ歐羅巴中ノ騷亂ヲ醸生セリ而シテ其騷亂中戦死スルモノ五千萬ノ夥シキニ至ルト雖モ終ニ能ク耶蘇教國ノ政府舉テ法皇ノ威權ヲ抑制スルノ功ヲ奏セリ⁶⁰

ここでは「Reformation」は「宗門改革」と訳されているが、ルターが教皇の権威に反抗し「Reformation」を始めたこと、それによってヨーロッパで争いが起こり多数の犠牲者が出たこと、キリスト教国が教皇の権威を抑制するのに成功したことが述べられている。焦点が当てられているのは、教皇の強大な権威が、「Reformation」によって抑制されたことである。教皇が暴虐であると糾弾されていることから、反カトリック的な記述だと言えるが、これは、グッドリッチが会衆派教会の牧師の家に生まれたプロテスタントだったためであろう⁶¹。

『パーレー万国史』では「Reformation」は非常に簡単に言及されているだけだったのに対し、より詳細に説明しているのが、西村茂樹による『校正 萬國史略』である。西村は、佐倉藩の支藩である佐野藩に仕え、洋学を学び、幕末から明治初期にかけて西洋の書物を次々に翻訳し、『明六社』創設にもかかわった、明治初期を代表する知識人である⁶²。西村は、前述のタイトラーの歴史書の冒頭部分を『萬國史略』として訳出していた⁶³。彼が、タイトラー以外のさまざまな著書も利用して⁶⁴、「上古(古代)」「中古(中世)」「近世(近代)」を包括する通史として、1872(明治5)から76(明

⁵⁸ 南塚信吾「近代日本の「万国史」」秋田茂他編著『「世界史」の世界史』ミネルヴァ書房、2016年、295-296頁；小沢、327-329頁；グッドリッチ著、牧山耕平訳『巴來萬國史 上・下巻』文部省、1876年。

⁵⁹ Goodrich, pp. 240-242; グッドリッチ『巴來萬國史 上巻』426-433頁。

⁶⁰ Goodrich, p. 242; グッドリッチ『巴來萬國史 上巻』430-431頁。原著では、ルターが反対したのは、教皇の権威だけでなく、「教会の墮落 the corruptions of the church」だと書かれているが、牧山はこれを省いて訳している。

⁶¹ 岡崎「日本における世界史教育の歴史(1-1)」33-34頁。

⁶² 小沢、41-64頁。

⁶³ 同書、51-56頁。

⁶⁴ 西村は、タイトラー以外に、アイルランド人のテイラー、アメリカ人のエマ・ウィラード、オランダ人のウインネの著作を参照したと述べている。小沢、60頁；岡崎「日本における世界史教育の歴史(1-1)」38頁。

治9)年にかけて刊行したのが『校正 萬國史略』である⁶⁵。「Reformation」に関する記述は、「近世ノ史一」にあたる第七巻にまとまっている⁶⁶。

この著作も万国史なので、概ねイタリア、ドイツ、スペイン・ポルトガル、ネーデルラント、フランス、イギリスという各国史によって構成されている。しかし、1章の大航海時代と並び、独立した章を与えられているのが「第五 教法改正」である⁶⁷。この章も基本的には16世紀前半のドイツを扱った章であるが、途中でスイスの「Reformation」の動向やイエズス会についての記述も含まれるなど、完全な一国史ではなく、「Reformation」に焦点が当てられている。16世紀前半の「Reformation」の説明は12丁(24頁)にわたる詳細なものである。西村は、15世紀に「基督教改正ノ説」が起こったが、それは「其教事ノ聖教ニ反スル者」が出てきて、「教王(教皇)」の多くも仮初めの「教事」を奉じ、「教法ノ奥旨」に達しておらず、「教王」「教長(司教)」「教士(司祭)」などにも、行いと説くことが一致しないものがあり、「聖教ノ正義ヲ遵守シ之ヲ失ハザル者」は非常に稀だからだと説明する。そのため、古昔に遡り、「聖教ノ正義」を自得し、力を尽くして「教王」に抵抗する者たちが出てきて、「教法改正ノ説」を唱えたが、「教王教士等」が力を尽くしてこれを防いだという⁶⁸。

しかし、教皇レオ10世がサン・ピエトロ大聖堂を建てるために「赦罪ノ允許(贖宥状)」を販売させたことに対し、1517年に「馬爾丁路悋(マルティン・ルター)」がこれを批判する「九十五條ノ意見」を記し、ヴィッテンベルクの教会に貼り出したことから「Reformation」が広がったとする。西村は、ルターの簡単なプロフィール、教皇によるルターの破門と両者の決裂、ヴォルムス帝国議会でのルターの態度、その後のカトリックとルター派諸侯の対立激化、シュマルカルデン戦争、1555年アウクスブルクでの「教法和諧ノ會議」でのルター派公認など、一連の政治的事件や争いを説明している⁶⁹。その後の章でも、16世紀後半から1618年にかけてドイツでカトリック、プロテスタント両派の対立が深まったこと⁷⁰、ネーデルラント人が「羅馬教ノ偶像ヲ破壊」したことに端を発するネーデルラントでの蜂起⁷¹、フランスで「教法改正ノ豪傑」であるカルヴァンが現れ、スイスに亡命した後、フランス国内でカトリックとプロテスタントが争いを繰り広げたこと⁷²、ヘンリー8世からエリザベス1世までのイングランド国教会の確立の過程について説明している⁷³。このように記述の大部分は、ヨーロッパ各国における、「Reformation」に起因する政治的な闘争や交渉、制度の改

⁶⁵ 『校正 萬國史略』は、10巻11冊から構成されており、明治5年から9年にかけて出版された。小沢、62頁；岡崎「日本における世界史教育の歴史(1-1)」37-38頁。

⁶⁶ 西村茂樹編『校正 萬國史略卷之七』編集者蔵版、1873-75年。

⁶⁷ 同書、18-29丁。

⁶⁸ 同書、18丁。

⁶⁹ 同書、18-29丁。

⁷⁰ 同書、35-38丁。

⁷¹ 同書、38-44丁。

⁷² 同書、44-52丁。

⁷³ 同書、53-61丁。

革を説明したものである。

ただし、西村は、彼が言うところの「教法」、つまり教義や儀礼などの宗教的要素にもある程度は言及している。ルターが批判した、カトリック教会の「赦罪（贖宥）」だけでなく⁷⁴、ルターやツヴィングリが「聖經（聖書）」を教えの根拠としていたこと⁷⁵、ルターが聖書をドイツ語に翻訳したこと、ルターが修道士の「戒行」を止めて「保拉ノ加他隣（カタリーナ・フォン・ボラ）」と結婚したこと、ルターが新約聖書の講義をしていたこと⁷⁶、ルターとツヴィングリの教えは概ね異なることはなかったが、「晚餐ノ禮ニ於テ酒ト餅トラ用フルノ趣意」についてのみ違ったことなどに言及している⁷⁷。

プロテスタントの中にも、さまざまな宗派があったことにも触れられている。西村は、ルターとツヴィングリの聖餐論に違いがあり、1529年のマールブルク会談が決裂に終わったことを述べた後、「新教ハ最初ヨリ既ニ路得派、東盈黎派、甲爾文後ニ出ヅノ三派アリ」と、当初からプロテスタントは、ルター派、ツヴィングリ派、カルヴァン派の三派に分かれていたとする⁷⁸。イングランドのプロテスタントには、カルヴァン説を遵守しカトリックの理に合わないところを改正しようとする「彪力單（ピューリタン）」やローマ教皇の管轄を離れ、教権を長老に委任しようとする「不勒斯比得（プレスビテリアン）」もいたという⁷⁹。急進派にも言及があり、新教が出てくると、異端の諸説も起こり、「托馬閔塞爾（トーマス・ミュンツァー）」が主唱する「亜拿巴普的（アナバプテスト）」の教派が「最威」であり、1525年にはこの教徒が、新約聖書の講説や司祭を選ぶ自由などを求め乱を起こしたとも述べている⁸⁰。さらに、「來丁ノ約翰（ヨハン・ファン・ライデン）」が乱を引きおこし、1533年に「閔士得（ミュンスター）」を攻めて陥し、王を名乗ったため、1535年に新旧両教の諸侯がヨハンを捕え、殺害したことにも触れている⁸¹。

近世のカトリックの動向に関する記述は、プロテスタントに比べると非常に乏しい。基本的にはプロテスタント側の動きに教皇やカトリックの王侯などが取った対応といった消極的な動きについて触れるのみだが、「耶修的ノ教會（イエズス会）」については、1丁（2頁）にわたり記述されている⁸²。西村が強調するのは、イエズス会が、「羅馬加特力教ノ中ニ於テ、新教ニ抵抗シテ最力アル」とプロテスタントに対しもっと有効に抵抗したことである⁸³。彼はさらに、プロテスタントへの攻撃的態度を以下のように説明している。

⁷⁴ 同書、18-19丁。

⁷⁵ 同書、20、22丁。

⁷⁶ 同書、21丁。

⁷⁷ 同書、22-23丁。

⁷⁸ 同書、23丁。

⁷⁹ 同書、57丁。

⁸⁰ 同書、22丁。

⁸¹ 同書、25丁。

⁸² 同書、29、35丁。

⁸³ 同書、29丁。

此教會ノ旨趣ハ、總テ波羅特士教ヲ唱フル者ハ、其說如何ンヲ論ゼズ、必之ヲ排撃スベシ、加特力ノ國中ニハ、教法改正ノ語ヲシテ其迹ヲ絶シムヘシ等ヲ以テ其大綱トス⁸⁴

そして、そのためにイエズス会は、カトリックの教えを広めるべく、「講師懺罪師」を諸国に派遣し説諭させ、南アメリカやアジアの民も、カトリックの「教法」を信ずるようになったとする⁸⁵。

トレント公会議については、「第七 日耳曼ノ史」という16世紀後半以降のドイツ史を扱う章の冒頭で、簡単に触れられている。ここでは、1563年に「多連的ノ會議（トレント公会議）」で全国の民は「教王ノ教法」に従うべく、「赦罪及び其他ノ禮式」はカトリックの法に従うべきだと決議され、これに対し新教の徒が大いに怒ったため、両派は互いに「仇敵」だと見なしたと述べられている⁸⁶。

以上のように、西村の『校正 萬國史略』は、ドイツを中心として各国の「Reformation」をかなり詳細に説明したものである。記述の中心は、主に王侯貴族による争いや交渉、制度の変更といった政治的な事件に置かれていた。これは、この時代の一国史が、彼らのような社会的な地位の高い者たちによる政治や外交に焦点を当てていたことを反映したものであろう。ただし、教えや礼拝といった信仰に関わる要素についても、簡潔ではあるが言及されており、明治期の日本人が、「Reformation」の基本的な知識を知るための重要な歴史書となったのではないかと推測される。

西村茂樹の『校正 萬國史略』と同時期に出た万国史に『萬國通史』がある。この3編9冊から構成された著作は、京都の幕臣だった洋学者の作楽戸痴鶯など複数の訳編者によって、1873（明治6）から1876（明治9）年にかけて文部省によって刊行された⁸⁷。原著は、イギリスの歴史学者ホワイトの手による学校教科書 *Outlines of Universal History* である⁸⁸。この著作は、古代、中世、近代という三つの時代に分けて西洋の歴史を叙述しているが、「Reformation」は近代の第1章“THE ERA OF THE REFORMATION”で扱われている⁸⁹。この箇所は、1874（明治7）年刊の『萬國通史下編 卷之上』に該当するが、越後長岡出身で慶應義塾卒業後に、母校や東京郵便電信学校教員を勤めた稲垣銀治が訳編を手がけている⁹⁰。

⁸⁴ 同書、29丁。

⁸⁵ 同書、29丁。

⁸⁶ 同書、35丁。

⁸⁷ 岡崎「日本における世界史教育の歴史（1-1）」37、47頁。

⁸⁸ Henry White (ed.), *Outlines of Universal History*, Edinburge, 1853.『萬國通史』の「序」には、「一千八百七十年刊行英國保維多氏」とあるので、翻訳で使われたのは1853年の初版ではなく1870年版ということになる。書名は明示されていないが、『萬國通史』の「近代史」でも、明らかにそのまま訳している部分があるため、岡崎の推測通り *Outlines of Universal History* が原著だと考えるのが妥当である。岡崎「日本における世界史教育の歴史（1-1）」48頁。この著作が学校用であることは、タイトルページの“for the Use of Schools.”から分かる。

⁸⁹ White, pp. 173-188.

⁹⁰ 稲垣銀治訳編『萬國通史下編 卷之上』文部省、1874年。稲垣銀治については、以下を参照。富田正文監修、丸山信編著『福澤諭吉とその門下書誌』慶應通信、1970年、82頁；坂本保富「明治初期における教育近代化の問題状況—日本の教育近代化と米百俵の主人公・小林虎三郎の軌跡—」『教職教育』2、2009年、31頁。

『萬國通史』は、「Reformation」を「宗教改革」という訳語で表した最初期の書物の一つである⁹¹。ホワイトは、第1章第1節「The Reformation」の冒頭を、中世が終わり、近代が始まる16世紀は、「多くの重大な変化many momentous changes」によって特徴づけられるが、その中で“the reformation in religion”が最も重要であるという記述で始めている⁹²。稲垣は、これを「宗教改革」と訳した⁹³。ホワイトが「reformation」を小文字で、つまり一般的な「改革」として表現していることを汲みとり、「宗教における改革」という意味を込めたのかもしれない。ただし、稲垣は、他の箇所では、「The Reformation」を、「レホルメーション」「宗旨改革」と訳している⁹⁴。他方稲垣は、ホワイトが「THE REFORMATION」と表現している節の表題を、「第一章 宗教改革の事」と訳しているため⁹⁵、小文字と大文字の「reformation」を明確に訳し分けしているわけではなく、訳語に一貫した方針はなかったことが分かる。この時期には「religion」「Reformation」両方の訳語が固まっていなかったため、稲垣は、訳語を混在させてしまったのであろう。

ホワイトは、中世の「羅馬教（カトリック教会）」の聖職者が、大きな収入を得て、奢侈に流れたり、婚姻したり、聖職売買するなど墮落していたことを指摘し、法王レオが「シントペートルの大寺院（サン・ピエトロ大聖堂）」建立の資金集めで「インジュルゼンシ（贖宥状）」を販売させたことを批判した「マルチン、ルザル（マルティン・ルター）」によって「Reformation」が始まったとする。そして、ルターを支持する諸侯がドイツで増えていき、1555年「アウクスブルフの宗旨和睦（アウクスブルクの宗教平和）」、皇帝カール5世の退位までのドイツでの改革の進展が描かれる。ルターから始まった「Reformation」がスイス、デンマーク、ブリテンに波及したことにも一言触れられてはいるが⁹⁶、分量的にドイツに関する記述が圧倒的に多い。記述の中心はやはり政治的事件に置かれており、教義や儀式については簡単にしか触れられていない。

しかし、ルター派以外の改革者にも、短いながら説明はされている。他の新説を唱える者として「アナバプタイスト（再洗礼派）」の「トウマス、モンズル（トーマス・ミュンツァー）」の社会改革を目指す説が紹介され、スイスに「宗旨改革」が波及したこと、「ズワイングル（ツヴィングリ）」とルターは考え方が違い、「ズワイングル派」という分派ができたことも説明されている⁹⁷。「ゼアンコーアン通例ジョンカルウキン（カルヴァン）」については、ツヴィングリの主見に基づき、これを

⁹¹ NDL Ngram Viewer での調べによる。（<https://lab.ndl.go.jp/ngramviewer/> 2024年11月2日閲覧）前年1873（明治6）年刊の『英國法律全書 首巻』における、ヘンリー8世による「宗教改革ノ議」について述べた箇所（33丁）が最古の用例である。1874年5月刊の『百科全書 養生編下』文部省、32丁にも「一千五百年代宗教改革ノ時」という記述がある。

⁹² White, p. 173.

⁹³ 稲垣、1丁。

⁹⁴ 同書、10、14、30、32丁。

⁹⁵ White, p. 173; 稲垣、1丁。

⁹⁶ 稲垣、10、14、23丁。

⁹⁷ 同書、9-11丁。

折衷し、「一派の教法」を立て、「子ーゼルランド地方（ネーデルラント）」にも広がったとされる⁹⁸。この三者については、その宗教的主張についてもそれぞれ簡単にではあるが触れられている。さらに、イタリアやスペインから、「日耳曼プロテスタント諸国」に逃亡した者の一人に「セルベチウス」がおり、「ゼ子バ都（ジュネーブ）」を通った際にアレイオス派だと疑われ、カルヴァンの許可で火刑に処せられたことにも言及がある⁹⁹。

ホワイトは、中世のカトリック教会が墮落していたことを認めてはいたが、16世紀の改革によって健全化したことを強調した。1564年の「法王」の決定まで20年以上続いたトレントの「大公会（公会議）」の過程をホワイトは、「the Catholic Reformation」と呼び、稲垣をこれを「カトリックレホルメーション」と表記している¹⁰⁰。彼によれば、これによって多くの悪癖が除去されたという¹⁰¹。この公会議で、従来の伝統や慣習が、「宗法」の一部となり、厳格に確定され公布されたと述べ、「アポクリス（聖書の外典・偽典）」の正当性、「宗旨の信心、善行」に関する根拠は「聖經（聖書）」だけでなく、教会に受け継がれてきた「傳説」にも起因すること、「プウルゲートリ（煉獄）」の説、死者や「神聖（聖人）」への祈りなどが認められ、トレント公会議での重要な決定についても説明している。この改革で「プリレート（高位聖職者）」になるような権力のある人々も厳しく排斥されたため、種々の穢行も止み、教皇一族も貪欲や復讐のために恐るべき罪悪を行うことはなくなったという¹⁰²。

第2節 1880年代の万国史

1880年代後半以降に大きな影響力を持った万国史の著者として、ジョージ・パーク・フィッシャーが挙げられる。彼は、イエール大学で神学教授を務めた神学者であったが、その後歴史学教授に転じた人物である¹⁰³。彼が1885年に刊行した*Outlines of Universal History*（以下『普遍史概観』と表記）は、1893（明治26）年には長澤市蔵によって抄訳され『新編萬國歴史』というタイトルで日本でも紹介された¹⁰⁴。岡崎勝世によれば、フィッシャーの著作は、天野為之、白鳥庫吉、今井恒郎、小川銀次郎、辰己小次郎、磯田良、大和田建樹、木村鷹太郎、原勇六、松島剛たちの歴史教科書で参照されていた¹⁰⁵。

⁹⁸ 同書、24-25丁。

⁹⁹ 同書、24丁。

¹⁰⁰ White, p. 184; 稲垣、26丁。

¹⁰¹ 同書、26丁。

¹⁰² 同書、28丁。

¹⁰³ 岡崎「日本における世界史教育の歴史（1-2）」15頁。

¹⁰⁴ George Park Fisher, *Outlines of Universal History*, New York/Cincinnati/Chicago, 1885; 長澤市蔵編『新編萬國歴史』内田老鶴圃、1893年; 南塚、312頁。

¹⁰⁵ 岡崎「日本における世界史教育の歴史（1-2）」12、20、35頁; 岡崎勝世「日本における世界史教育の歴史（1-3）「文明史型万国史」の時代2」『埼玉大学紀要・教養学部』52（2）、2017年、36、38、39、43、52、54、55頁。

フィッシャーの『普遍史概説』では、「Reformation」に関する記述は、「Period II. The Era of the Reformation (1517-1648)」にまとめられている。つまり、「宗教改革の時代」が、1517年のルターの『95箇条の提題』から1648年のヴェストファーレン平和条約まで続くとしてされている¹⁰⁶。ここでは、ドイツ、スイス、デンマーク、スウェーデン、イングランド、ネーデルラント、フランス、スコットランドと概ね国別に、「Reformation」が導入された過程を描いている。

神学や礼拝についての記述は最小限で、記述の中心を成すのは、君主を中心とした政治・外交的事件にある。出来事の記述がほとんどであるため、「Reformation」の歴史上の意義については明確ではないが、冒頭に置かれた導入部には、乏しいながら以下のような意味づけがされている。フィッシャーは、「religion」についての巨大な議論や変化を、学芸の復興や顕著な発明・発見に見られるような人間精神の一般的な動きの表れだと見なしている。そして、中世ではウィクリスやフスのような教会への反抗は鎮圧されてきたが、以下のような大きな不満は存在していたという。その原因の一つ目は、金銭強要などの教会業務の腐敗に対する不満、二つ目は、教皇の行使する権威が、君主と各国教会の権利と衝突することに対する非難、三つ目は、死者への祈りや聖人に対する祈願のような異論の余地のある儀式、ミサや聖餐式、救済における信仰の位置づけのような重要な教義に関する議論が生じたことである。その結果「the Protestant Reformation」と呼ばれるものが起こったという。そして、この時代には、国家内での信仰と礼拝の一体性を求める考えが支配的だったため、カトリックとプロテスタントのどちらを選ぶかで争いが起きたと述べてつとも、政治的動機や国家拡大に対する欲望の強さが、宗教的な違いを凌駕することもあったと指摘している¹⁰⁷。

「Reformation」の歴史的意義については、「カルヴァン主義の影響」についての短い文章でも簡単に触れられている。彼によれば、カルヴァン個人の影響は学識ある人々に及んだが、彼が作り上げた教会組織の影響は、さまざまな国の平民にも及んだ。カルヴァン主義は、教会や「religion」を、世俗権力に従属させることも拒絶したという¹⁰⁸。

フィッシャーは、「The Catholic Reaction カソリック反動」についても触れている。プロテスタントの考え方が広がったことに対し、トレント公会議の開催や「ジェシュイト組合（イエズス会）」の活動、異端審問所や検閲などで、対抗したことにも触れている¹⁰⁹。

この時期の歴史教科書の中で、より大きな影響力を及ぼしたのが、ウィリアム・スウィントンが1874年に刊行した*Outlines of the World's History*である¹¹⁰。スウィントンは、スコットランド出身で、カナダに移住した後、教師やジャーナリストを経て、幅広い分野の教科書の執筆を本業とした

¹⁰⁶ Fisher, pp. 396-448; 長澤、56-161頁。

¹⁰⁷ Fisher, pp. 396f.; 長澤、56-57頁。

¹⁰⁸ Fisher, p. 412. 長澤は、この部分の訳出を行っていない。

¹⁰⁹ Fisher, pp. 412-414; 長澤、86-89頁。

¹¹⁰ William Swinton, *Outlines of the World's History, Ancient, Mediaeval, and Modern, with Special Relation to the History of Civilization and the Progress of Mankind*, New York/Cincinnati/Chicago, 1874.

著述家である¹¹¹。小沢栄一によれば、この著作は、1886(明治19)年から1889(明治22)年の間に、複数の訳者によって翻訳・刊行された¹¹²。さらに、岡崎によれば、中学校でも学ばれており、天野為之、木村一步、辰己小次郎、小川銀次郎、磯田良、大和田建樹、菊池熊太郎、原勇六、石田新太郎、松島剛といった多くの著述家の歴史書で参照されるなど、明治中期の日本で大きな影響力を持っていた¹¹³。ここでは、松島剛による翻訳『萬国史要 下巻』1887(明治20)年を参照しながら¹¹⁴、スウィントンの「Reformation」観を概観する。

スウィントンは、「近代史」の記述を、主に世紀毎の「Great Events大事件」に区分して行っている。「Reformation」に関して独立した章や節は置かず、「第十六世紀の大事件」の章の各国史の中で、断片的に触れているのみである。最もまとまった記述は、「チャーレス第五世(カール五世)」治世中の二大事件の一つ「基督新教の起こりし」についての部分である¹¹⁵。彼によれば、中世後期に宗教にかかわる不平が起こったという。アルビジョワ派やウィクリフ、フスは、「法王」が宗教上主張する権力、ローマ教会の「教法儀式」が不正不法だと批判をしたが、異論者の多くは異端の罪をもって焚殺されたという。しかし、16世紀に入ると、教会の実務上背理不正があること、「法王」による政治的干渉、教義や儀典のなかに聖書の本義に背反するものがあるという感想が衆人の中に発生した。そこで、「宗教改革の気焰」が西部ヨーロッパの大半に蔓延したという¹¹⁶。

「Reformation」をはじめたのは、レオ十世が教会の金銭的問題を補うために「贖罪の制」を販売したことに批判したドイツの「マーティン・ルーテル」である。ルターの説は、教皇がイタリアの工芸装飾への支払いのために巨額の財貨を自国から奪おうとするのを見て怒った「ゼルマンの侯伯」のあいだで広まった。さらに新説の蔓延は速く、ドイツ、フランス、スイス、イギリス、スコットランド、スカンジナビア諸国に分かれ、教派となり、根を張ったという¹¹⁷。その後、ドイツ、イングランド、ネーデルラント、フランスでの「Reformation」の進展や引き起こされた争いが説明されるが、教義や儀礼についての記述は乏しく、主に君主を中心とした政治的な事件として描かれている¹¹⁸。カルヴァン派については、スイスに関するまとまった記述がないこともあり、フランスの新教の性質に関する箇所では、フランスの新教徒「ヒューゲノット」はルターではなく、「ジョンカルヴィン」の門徒だと、簡単に言及されているだけである¹¹⁹。そのため、「Reformation」はルターの

¹¹¹ 岡崎「日本における世界史教育の歴史(1-2)」21頁。

¹¹² 小沢、326-328頁。

¹¹³ 岡崎「日本における世界史教育の歴史(1-2)」12、20、24、29頁；岡崎「日本における世界史教育の歴史(1-3)」36、38、39、41、52-54頁。

¹¹⁴ 維廉斯因頓著、松島剛訳『萬國史要 下巻』春陽堂、1887年。

¹¹⁵ 同書、526-532頁。

¹¹⁶ 同書、526-528頁。

¹¹⁷ 同書、528-531頁。

¹¹⁸ 同書、531-575頁。イングランドのヘンリー8世による、礼拝方法の改革や多数の「寺院」の廃絶についての記述は、数少ない例外である。同書、544頁。

¹¹⁹ 同書、554頁。

影響で各国に広まったという、ドイツ・ルター中心的な見方だと言える。16世紀のカトリック教会の動向については、スペインやイタリアに関する独立した節がないこともあり、ほとんど触れられていない。

やはり、政治的事件に関する記述がほとんどであるため、「Reformation」の歴史上の意義については明確ではない。しかし、スウィントンは、カール5世は「中代最後の勇将」「最後の維持者」のようなものであり、その失敗の原因を、既に中世が過ぎ去り、「新智力新宗教」が勃興し、近代の精神が進歩するという時勢に合致しなかったことだと述べているため¹²⁰、「Reformation」をルネサンスなどと同様に近代精神の進歩の表れとして理解していたことになる。

フィッシャーやスウィントンを参照しながら書かれた歴史教科書のうちで特に影響力が大きかったのは天野為之『萬國歴史』1887(明治20)年である¹²¹。天野為之は、東京大学文学部理財学科で経済学を学び、東京専門学校設立に参加し、早稲田大学の学長も務めた人物だが、大学では経済学関連講義以外に歴史なども担当していたため歴史教科書の執筆も行った¹²²。天野の『萬國歴史』は、明治19～26年に刊行された検定済み教科書のうち、翻訳書ではなく、日本人の編集の手が加わっている唯一の教科書であるため、岡崎勝世は、この時期を天野の『萬國歴史』が教科書界を支配していた時期だと性格づけている¹²³。

天野は、スウィントンと同様に、16世紀以降の「今世史」を、世紀毎に記述している。16世紀は、イタリア戦争、ドイツ、ネーデルラント、フランス、イギリスについての章によって構成され、国毎に「Reformation」の進展やその過程で起こった争い、制度の改革が説明されている。最も詳細に「Reformation」について触れているのは、「査祿斯第五世(カール5世)時代」の「宗教改革ノ亂」という節である¹²⁴。「宗教改革」の原因は、やはりカトリックの教理儀式や「聖經(聖典)」に背いたり、疑う者が増えたり、諸々の「僧侶」による弊害に求められた。そして、ウィクリフやフスの説は撲滅されたが、「法王」への不満は残り、人民のローマを尊敬する心は衰え、「思想ノ自由ヲ要求スルノ念」が大いに増大したため、「Reformation」による絶大なる変化が現出したという¹²⁵。やはり「Reformation」のはじまりは1517年の「麻るちん、路さー(マルティン・ルター)」による贖宥状批判だとされている。そして、ルターを支持する「侯伯」がドイツで増えていき、さらにはドイツだけでなく、フランス、スイス、イングランド、スコットランド、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンなどの諸国もルターの影響を被り、人民がカトリックに背き、教皇の権力に抵抗するようになったとする¹²⁶。フランスで「加るびん」教徒が蔓延したという記述はあるが、カルヴァン、カ

¹²⁰ 同書、537頁。

¹²¹ 天野為之『萬國歴史』富山房、1887年。

¹²² 岡崎「日本における世界史教育の歴史(1-2)」9-10頁。

¹²³ 同論文、3頁。

¹²⁴ 天野、373-383頁。

¹²⁵ 同書、373-374頁。

¹²⁶ 同書、377頁。

ルヴァン派についてのまとまった記述はないため、ルター中心主義的な見方だと言える¹²⁷。教義や儀礼についての記述が乏しいところは、天野が参照したフィッシャーやスウィントンと同様である。近世カトリックの動向についても、ほとんど触れられていない。

第3章 文明史

万国史における「Reformation」の記述は各国史の中で描かれた政治的事件の叙述が中心であったが、より明確な歴史的意味づけを日本の知識人に提供したのは、文明史と呼ばれる一連の著作であった。小沢栄一によれば、開化期の日本では、欧米文明の内容とその発達を把握しようとする歴史意識が見られたため、1870年代初頭から文明史に対する注目が急激に高まった¹²⁸。特に文明史の代表であるギゾーの『欧羅巴文明史』、バックルの『イングランド文明史』は、明治期に広く読まれ、日本人の歴史記述にも大きな影響を及ぼしたため¹²⁹、これらの著作に見られる「Reformation」観を取り上げる。

第1節 ギゾーとバックル

フランソワ・ギゾーは、カルヴァン派として育ち、ソルボンヌで近代史講座の教授を務め、政治家としても活躍したフランスの知識人である。1828年に刊行されたフランス語の『ヨーロッパ文明史』は、1842年にC. S. ヘンリーによって英訳されたが、小沢栄一によれば、西村茂樹はこの英訳本を幕末から明治初年、福澤諭吉は1872から73（明治5-6）年頃に読んでいた¹³⁰。1870年代に次々に日本語訳が出版され、ヘンリーの英訳本から重訳された永峰秀樹訳『欧羅巴文明史』1874-77（明治7-10）年は特に広く読まれた¹³¹。この翻訳は14巻14冊から構成されるが、原著の「Lecture XII THE REFORMATION」にあたるのは、「教門改革」と題された12巻である¹³²。訳者の永峰秀樹は、沼津兵学校出身で、当時は海軍兵学校教官を務めており、ミルの『代議政体』などさまざまな翻訳を手がけた人物である¹³³。

ギゾーは、「教門改革」の期間を、1500年代の初めから1650年代頃までだと見なす。はじまりの

¹²⁷ 同書、389頁。

¹²⁸ 小沢、104-105頁。

¹²⁹ 小沢、104-122頁；酒井三郎『日本西洋史学発達史』吉川弘文館、1969年、50-66頁。

¹³⁰ 小沢、106、108頁。原著はFrançois Guizot, *Histoire générale de la civilisation en Europe*, Paris, 1828. ヘンリーによる英訳は、François Guizot, with occasional Notes, by C. S. Henry, *General History of Civilization in Europe from the Fall of the Roman Empire to the French Revolution*, New York, 1842. ただし、小沢によれば、永峰が翻訳で用いたのは、1873年版である。小沢、113頁。

¹³¹ 小沢、111-113頁。

¹³² ギゾー氏著、米國ヘンリー氏訳、永峰秀樹再訳『欧羅巴文明史十二』稲田政吉、1877年。なお、本書の読解のために以下も参照した。フランソワ・ギゾー著、安土正夫訳『ヨーロッパ文明史 ローマ帝国の崩壊よりフランス革命にいたる』みすず書房、2006年。

¹³³ 小沢、113頁。

時期を正確に示すことは緊要ではないが、1520年に「マルチン、リューゼル（ルター）」が「ウキツテンボルグ（ヴィッテンベルク）」で「法王」から下された罪状書を公衆の前で焼き捨て、「羅馬教會」から離脱し独立したときだとする。その終わりは、「ウエストファリア」の条約だとされる。その理由として、「教門改革」がはじまったことによる最も重大な変化が、ヨーロッパ諸国が、カトリック国とプロテスタント国に分かれ、相争うようになったことであり、ウエストファリア条約で、両派が親睦平和に生活することを約束し、宗派の区別なく同盟締結を行うようになったことを挙げた¹³⁴。

ギゾーの『歐羅巴文明史』は、ヨーロッパ文明の進歩、発展の過程を古代から近代まで概観した著作であるが、「教門改革」は文明の発展にとって決定的に重要な歴史的事件だと評価された。彼によれば、「教門改革」の時代は、「政事教門理學文學」などで前の時代よりも重大な事件が起こったが、その中でも最も重大な事件が「教門改革」であった¹³⁵。そして、「教門改革」が起こった最大の原因は、「新生ノ一力ニシテ思想ノ自由ヲ得ントスルノ大努力」であると主張した¹³⁶。彼によれば、「教門」にせよ「理學」にせよ人々の「推考思察ノ力」は1000年代から1500年代までに次第に蓄積したにもかかわらず、「人心ノ主治者」であるカトリック教会の教皇や聖職者は力を持っていなかったため、自由を求める人々の心は、思想や言行を束縛するものに反抗し、自ら考え、判断しようとしたという¹³⁷。そのため、彼は、「教門改革」が成功した国では、思想が活発化し、自由の進歩が生じ、人心が束縛を脱し自由を得たとする¹³⁸。反対に、「教門改革」が入ってこなかったスペインやイタリアのような国では、この300年間精神的活動は停滞したままだったと指摘している¹³⁹。そして、16世紀にローマ教皇庁という「教門ノ王権政体」に背き、「僧徒ノ専制」を廃絶しようとする反乱が起こったが、ギゾーの生きていた19世紀初めでは世俗の専制君主も攻撃を受け、専制の特権を失ったという¹⁴⁰。つまり彼は、「Reformation」による信仰や思想の自由を、革命による政治的自由の先駆だと意味づけている。

ただし、ギゾーは、文明の進歩を「Reformation」と結びつけているものの、カトリックの国であるフランスの知識人だったこともあってか、その記述に反カトリック的な色合いが薄い。彼は、中世のローマ教皇庁やカトリック教会を信仰の自由を束縛する専制権力だと見るものの、16世紀に教皇庁が暴虐の限りを尽くしていたという主張は真実ではないと評価した¹⁴¹。「Reformation」の原因も、カトリック教会の墮落というより、人々の精神的活動の進歩によると考えていたことは、既に述べたとおりである。

¹³⁴ ギゾー氏、4-6丁。

¹³⁵ 同書、11丁。

¹³⁶ 同書、19丁。

¹³⁷ 同書、19-23丁。

¹³⁸ 同書、28丁。

¹³⁹ 同書、30丁。

¹⁴⁰ 同書、41-42丁。

¹⁴¹ 同書、22丁。

なお、永峰は、ギゾーの記述を翻訳した後に、学者への参考として、「教門改革」に関する参考書を複数挙げ、思想信仰の自由と「Reformation」を結びつけるギゾーの議論に対し、新教徒も、自宗派の信仰から逸脱した者たちを弾圧・処刑していた例を挙げるなど、批判的な補足説明を行っている¹⁴²。当時の知識人が、西洋から入ってきた論をそのまま受け入れるのではなく、批判的に吟味していたことを示す一例と言える。

次に、ギゾーと並んでよく読まれたヘンリー・トーマス・バックルの『英国文明史』における「Reformation」観を見て行く。バックルは、1822年にイングランドのケント州リー市の裕福な家に生まれ、ほぼ独学で*History of Civilization in England*を執筆した人物である¹⁴³。小山哲によれば、この著作はタイトルには『イングランド文明史』とあるが、本文の分量を見るとイングランド以外の諸国・諸地域の記述の方がはるかに多く、「ヨーロッパ文明史」「世界文明史」として読まれた¹⁴⁴。福澤諭吉は1873から74年初めに原書入手し、慶應義塾で講義していたし、田口卯吉も『日本開化小史』を書く際に影響を受けたという¹⁴⁵。1875（明治8）年、1879（明治12）年にはそれぞれ日本語訳が出版された¹⁴⁶。

バックルは、人間の智力が進歩すると、それに応じて宗教も進歩すると考えていた。そして、彼はヨーロッパに入ってきたキリスト教は、人々が迷信を避けることもできない程の未開的段階にあったため、より複雑な儀式や信仰を求め、異教的儀式が入り込み、偶像崇拜の教義が付け加えられ、腐敗堕落したという。しかし、数世紀を経て後、ヨーロッパの人びとの智力が発達したため、この迷信に憤激し、16世紀に「Reformation」なる事件となって爆発したと主張した。彼は、暗黒時代である中世に人々は軽信しやすく、無知だったが、16世紀には人々の妄信と無知は急激に減退したとする。その結果、彼らは奇跡や聖人、伝説、偶像、煩雑な宗教的儀式、諸々の禁欲的苦行の比較的少ない宗教を組織立てる必要を感じ、これら全ては新教の確立によって成し遂げられたという¹⁴⁷。カトリックとプロテスタントを対比し、前者を迷信的、後者を文明的だと評価していることになる。

ただし、本来はこのまま迷信がなくなるはずなのにそうになっていないのは、国家が人民の信仰に干渉したためであり、さらには、宗教だけでなく国民性も文明の進歩に関係しているためだと、自分が考える文明進歩の法則と現実の食い違いの理由を説明している¹⁴⁸。

¹⁴² 同書、42-51丁。

¹⁴³ 西村二郎「バクル評傳」バクル著、西村二郎訳『世界文明史 第一巻』而立社、1923年、1-25頁。原著は以下の通り。Henry Thomas Buckle, *History of Civilization in England*. Vol. 1, London, 1857; Vol. 2, 1861.

¹⁴⁴ 小山哲「実証主義的「世界史」」秋田茂他編著『「世界史」の世界史』ミネルヴァ書房、2016年、275-276頁。

¹⁴⁵ 小沢、116-117頁。

¹⁴⁶ 同書、118-122頁。

¹⁴⁷ バクル、351-354頁。

¹⁴⁸ 同書、354-360頁。

第2節 福澤諭吉『文明論之概略』

ギゾーとバックルに強い影響を受けて「Reformation」を記述したのが福澤諭吉である¹⁴⁹。1875(明治8)年に刊行された『文明論之概略』で、西洋が文明化した理由を探るために、簡潔ではあるがその歴史についても触れている。そこで見られる福澤の「Reformation」観は以下の通りであった。

福澤は、「宗教」は文明進歩の度合いに従い変化するものだと言う。そして、無知野蛮の世であるローマの時代には、「耶蘇の宗教」が「虚誕妄説」を唱えても世に咎められることはなかったが、時が経ち、人民の「心思」を抑圧するようになった。しかし、人智発生力がこれに反発し、1500年代に「宗門の改革」が始まったという。これは、「羅馬の天主教」を排してプロテスタントの新教派を起こした出来事だと述べている。福澤の時代には新教の方が盛んだったが、これは、「宗教」の儀式を簡易に改め、古習の虚誕妄説を省て、正しく近世の人情に応じ、その知識進歩の有様に適すればなり。」と、知識進歩に合致したためだとしている¹⁵⁰。ただし、ヨーロッパ各国で必ず文明の進んだ国が新教、遅れた国が旧教を信奉しているわけではなく、「宗教」は個々の国の人民の文明の度に従って形を改めると付け加えている¹⁵¹。この部分は、バックルに依拠して書かれている¹⁵²。

また、カトリック教会は特権をほしいままにして、旧物を墨守していたが、書物を読み理を求めた者たちが、カトリック教会によって禁じられていた疑いを持ったために「宗教変革の大事件」が生じたとした。1520年に「ルーザ氏(ルター)」がはじめて法皇に反して新説を唱え、人々の心を動かしたが、旧教と新教の勝敗は容易には着かず、ヨーロッパ各国でそのために無数の人々が殺されたという。福澤は、ギゾーに基づき、この宗派間の争いの眼目は、教の正邪を主張することではなく、人心の自由を許すかどうかだと主張し、「Reformation」を人民自由の気風の現れであり、文明進歩の徴候だと評価した¹⁵³。

このように福澤は、バックルとギゾーの記述に依拠しながら、中世のカトリック教会は、儀式が煩雑で、非合理的な古い信仰に固執していたのに対し、「Reformation」によって、儀式が簡略化され、教えも合理的にすることで文明を進歩させたと述べていた。やはり、「Reformation」を、知識、文明、自由の進歩を促進した出来事だと位置づけていたことになる。

第3節 ドレイパー『學教史論』

ギゾーやバックル以外の重要な文明史の著作家として、ジョン・W・ドレイパーが挙げられる。ドレイパーは、イギリス生まれで、アメリカに移住した後、ペンシルヴァニア大学で医学博士の学

¹⁴⁹ 『文明論之概略』におけるギゾーとバックルの影響の詳細については、以下を参照。丸山真男『「文明論之概略」を読む 上 中 下』岩波書店、1986年。

¹⁵⁰ 福澤諭吉著、松沢弘陽校注『文明論之概略』岩波書店、1995年、157-158頁。

¹⁵¹ 同書、158頁。

¹⁵² 丸山『「文明論之概略」を読む 中』、207-210頁。

¹⁵³ 福澤、202-203頁；丸山『「文明論之概略」を読む 下』、47-50頁。

位を得て、分子物理学、生理学、化学の分野で有名になった科学者である¹⁵⁴。日本に紹介されたのは、彼が1874年に出版した *History of the Conflict between Religion and Science* である¹⁵⁵。この著作は、慶應義塾出身で、後に実用英学院や児童新聞社を創設するなど教育事業に携わった小栗栖香平によって1883（明治16）年に翻訳され、『學教史論 一名耶蘇教と實學との争闘』というタイトルで刊行された¹⁵⁶。小栗栖訳の冒頭には仏教学者の大内青巒が序文を寄せており、中西牛郎が仏教の改革を提唱する著書で言及するなど、キリスト教批判の文脈で読まれていた¹⁵⁷。他方では、福澤諭吉もこの本を所持し、坪内逍遙もバックルと並んで「文明史派」として言及し、キリスト教徒の村田勤も1898（明治31）年の「Reformation」に関する論考で参照するなど、明治期を通じて良く知られていたことが伺える¹⁵⁸。以下、小栗栖訳を参照しながら、そこに見られる「Reformation」観を検証する¹⁵⁹。

この著作は、西洋におけるキリスト教と科学の間の争いを、古代ギリシアから彼の生きていた19世紀まで概観したものである。ドレイパーは、「序」において、「實學史（科学史）」は、「人智天賦ノ擴張力」と「妄信私慾ヨリ生スル壓抑力」が相争う状態を記述するものと性格づける¹⁶⁰。前者が科学、後者が「religion」を表しているので、科学と「religion」を二項対立的なものとして理解していることになる。しかし、ドレイパーは、全ての「religion」を扱うのではなく、基本的に極度熱心な意見を持つ「羅馬舊教（ローマ・カトリック教会）」を扱い、平穩・中庸な説をとる「耶蘇教（プロテスタント）」「希臘教（正教会）」については多くを記すことはないと言う¹⁶¹。つまり、この著作は、カトリック教会と科学の間の闘争を中心に描いている。

ドレイパーの中心的主張は、ローマ・カトリック教会と科学、文明の進歩は相容れないことにある。彼は、カトリック教会は千年以上ヨーロッパの「人智」を支配していたため、その結果に責任があると述べ、中世ヨーロッパと文明の関係を検証した。中世には人口は停滞し、「世俗政府」と「法王政府」の二重の政府のうち後者が勝っており¹⁶²、野獣未開の民は巡礼や祈祷による病気の治療

¹⁵⁴ ドレイパーの経歴については以下を参照。ジョン・W・ドレイパー著、平田寛訳『宗教と科学の闘争史』社会思想社、1978年、327-329頁。

¹⁵⁵ John William Draper, *History of the Conflict Between Religion and Science*, New York, 1874.

¹⁵⁶ 戎維廉達勒巴兒著、小栗栖香平訳『學教史論 一名耶蘇教と實學との争闘』愛国護法社、1883年。小栗栖の来歴については、以下を参照。三田商業研究會編『慶應義塾出身名流列傳』實業之世界社、1909年、233-234頁。

¹⁵⁷ 『學教史論』序3-7頁；中西牛郎『宗教革命論』博文堂、1889年、67、75、86、135頁；星野、240頁。

¹⁵⁸ 佐々木隼相、片岡龍「日本と韓国における「実学」の近代化—福澤諭吉と李能和を中心に」『〈靈性〉と〈平和〉』3、2018年3月、122頁；小沢、21-23頁；村田勤「宗教改革の真相」『反省雑誌』13（5）、1898年、18-19頁。

¹⁵⁹ 小栗栖訳とは異なり1882年第8版の訳ではあるが、平田寛訳も参考にした。ジョン・W・ドレイパー著、平田寛訳『宗教と科学の闘争史』社会思想社、1978年。

¹⁶⁰ 『學教史論』序36頁。

¹⁶¹ 同書、序43-44頁。

¹⁶² 同書、414-423頁。

といった妄信を抱いているなど知的に停滞していた¹⁶³。ローマ教皇は、中央集権的な制度を作ることと、教会を思うがままにできるようになり、ヨーロッパ中の聖職者から金を積み、浪費をした。そして、聖職者たちも、ローマの悪風にならい、聖務や儀式で儲けても良いと考えるようになったという¹⁶⁴。そして、ローマ教皇は、ヨーロッパの「人智」を千年以上にわたり、抑圧してきたと結論づけた¹⁶⁵。さらに、中世のみならず19世紀においても、カトリック教会は、1870年の第一ヴァチカン公会議で教皇の「無過失（不可謬）」であることを決議し、近代文明を攻撃していたと主張した¹⁶⁶。そのため、「羅馬耶蘇教ノ徒ト、實學ノ徒トハ、其互ニ両立スル能ハサルヲ知ルナリ」と結論づけた¹⁶⁷。このようにドレイパーは、カトリック教会が支配した中世のヨーロッパでは、人々の間で迷信が蔓延しており、教皇も聖職者も腐敗しており、ローマ教皇の専制的な力で、知的な発展が妨げられていたし、彼が生きていた時代においても、教皇は科学に対する弾圧を止めておらず、カトリック教会と科学は根本から相容れないと主張していた。

しかし、カトリック教会とは異なり、「Reformation」は、近代科学と調和可能なものとして評価されている。ドレイパーは、1517年に「路得（ルター）」が「特赦免状（贖宥状）」を批判したことが「宗教改革」を招いたと見なすが、議論を促した真の理由は、「經典（聖書）」が「寺院（教会）」に依拠するのか、「寺院」が「經典」に依拠するのか、「真偽邪正」の基準はどちらなのかをめぐる疑問にあるとする¹⁶⁸。そして、ルターは、「予ハ羅馬法王ノ命ニ從ハザルベシ、如何ントナレバ、予ハ我聖經ヲ解スル爲メニ、天賦不羈ノ心ヲ有スレバナリ」と述べ、多くの支持者を得たという¹⁶⁹。そして、「宗教改革」の結果、「各新教寺院（各プロテスタント教会）」は、聖書を完全無欠の書物だと信じ、伝統に依拠せずに、「各自ノ見識ニ從フテ、之ヲ解スベキヲ知ラシメタル」ようになり¹⁷⁰、「維士發里ノ和睦（ウェストファリア条約）」の後、中部・北部ヨーロッパは精神的にローマカトリックを離れ、「自主獨立、人智ノ自由ヲ」得たという¹⁷¹。このようにドレイパーは、「Reformation」によって、プロテスタント教会では、教皇やカトリック教会の伝統ではなく、聖書を真理の基準だと定めるようになり、人々は聖書を自分で解釈する権利を得て、これが近代的な個人主義や知的な自由をもたらしたと評価した。さらに、彼は、科学が、蒸気機関など数多くの発明を成し遂げ、人間の生活を改善したことを述べた後に、こうした進歩を引きおこし、発明を促進した精神は、「獨立不羈ノ説」つまり個人主義にあり、この説はさらに社会的に「二大變革」、つまりアメリカとフランスの両革

¹⁶³ 同書、425-426頁。

¹⁶⁴ 同書、430-439頁。

¹⁶⁵ 同書、449頁。

¹⁶⁶ 同書、515-524頁。

¹⁶⁷ 同書、579頁。

¹⁶⁸ 同書、334-335頁。

¹⁶⁹ 同書、465-467頁。

¹⁷⁰ 同書、337頁。

¹⁷¹ 同書、467頁。

命を引きおこしたとする¹⁷²。このようにドレイパーは、ルターから始まった個人が自由にものを考えるという精神は、近代の技術的な発展や政治的自由をもたらしたと考えた。

彼はさらに、プロテスタント教会が、予定説などで、一部「定則管理説（世界が法則によって支配されているとする説）」を認めたことで、カトリック教会の「干渉説（世界は神の干渉によって支配されているという説）」が大打撃を受け、「宗教改革」を成し遂げた国では、奇跡はなくなり、聖遺物や贖宥状も大きな金銭的利益を上げなくなったという¹⁷³。また、「宗教改革」の主眼は、「君子担丁（コンスタンティヌス）」帝以来キリスト教に入り込んだ異教的要素を分離し、純粹無垢にすることにあり、そのため、「古説」を回復し、「馬利亜及徒弟等ノ禮拜（マリアや聖人に対する礼拝）」を禁じたとする¹⁷⁴。つまり、「Reformation」が、カトリック教会の迷信を除去したことを強調している。

ただし、ドレイパーは、科学や文明の進歩における「Reformation」の役割の限界も指摘している。ルターや「米蘭費西（メランヒトン）」は、「理学」を嫌っており、ルターは「亜里斯度徳（アリストテレス）」やスコラ学者を罵っていたが、「加爾維因（カルヴァン）」も同意見だったため、「宗教改革」は「理学」に対しては、何ら恩恵を与えなかったと評価した¹⁷⁵。そして、カトリックもプロテスタントも、聖書に反する「實學」を許さない点では同じだったとする¹⁷⁶。さらに、「異議異信」を死を持って罰することは絶滅していなかったと述べ、カルヴァンがジュネーブで「西爾威太士（セルヴェトゥス）」を火刑に処したこと例に挙げている。そして、「此新教ノ虐殺」と1629年にトゥールーズの宗教裁判所で行われた「瓦尼々（ヴァニーニ）」の火刑にどのような違いがあるのかと述べた¹⁷⁷。

しかし、ドレイパーは、科学とは決して相容れないカトリック教会とは異なり、プロテスタント教会は、科学と調和可能だという展望を持っていた。彼は、「實學ト宗教改革トハ、元ト是レ同時同誕ナルモノナリ」、「實學」は「宗教改革ノ同胞（實ニ孖兄弟ナリ）」と、科学と「Reformation」が同時期に生まれた、双子の兄弟のようなものと理解していた¹⁷⁸。そして、ルター以来プロテスタントの間で確立された、人は皆聖書を解釈する権利があることで一致するならば、「宗教改革ト實學トノ一致合體ハ、難事ニハアラズ」だという。何故なら、聖書解釈権は、「人智自由ノ基礎」であり、もし個々人の意志に聖書解釈が任されるとするならば、「宇宙書籍（實學）」でこれが許されな

¹⁷² 同書、487-511頁。

¹⁷³ 同書、400-403頁。

¹⁷⁴ 同書、468-469頁。

¹⁷⁵ 同書、338-339頁。

¹⁷⁶ 同書、343頁。

¹⁷⁷ 同書、341頁。ジュネーブで処刑されたのは、反三位一体論者のミカエル・セルヴェトゥス、トゥールーズで処刑されたのは、ジュリオ・チェーザレ・ヴァニーニである。なおヴァニーニが処刑されたのは1619年で、本文の処刑年は誤りである。伊藤博明責任編集『哲学の歴史4 ルネサンス』中央公論新社、2007年、46頁。

¹⁷⁸ 『學教史論』、562頁。

いはずはないからである¹⁷⁹。カルヴァンがセルヴェトゥスを火刑に処したり、プロテスタントの牧師が、「宇宙ノ推究」を「不信者及ビ不信神教徒」と非難したのは、「舊教主義」から脱し切れていなかったためであり、元々の主義に戻れば、科学との関係を回復することは可能だと主張した¹⁸⁰。

このようにドレイパーは、非合理的で知的な自由を認めないカトリック、ローマ教皇と、個人による知的な自由を認めるプロテスタント教会、ルターを二項対立的に理解し、後者は本質的に科学、近代文明と一致していると評価した。

第4章 信仰者の「Reformation」観

これまで見てきた万国史、文明史の書き手にもプロテスタントの信徒が含まれ、プロテスタント的な観点が記述に反映されていたにせよ、その記述の目的は、護教的なものだとは言えなかった。しかし、明治期には西洋から宣教師も入ってきて、日本人キリスト教徒も増えていった。彼らによる「Reformation」の記述は、より信仰に根ざしたものであることが予想される。他方で、この時期には排耶論と呼ばれるキリスト教に対抗する仏教側の言説が次々と出されていた。キリスト教徒であれ、仏教徒であれ、彼らが著作を出版する目的は、万国史、文明史といった歴史記述とは自ずから異なるはずであるため、本章では、信仰者による「Reformation」観を検証する。

第1節 キリスト教徒による「Reformation」観

幕末から明治初期にかけて日本で禁教になっていたキリスト教は、1873年のキリシタン禁制の高札が撤去されたことなどを通じて、事実上政府によって黙認されるようになった。こうして、キリスト教の各教会が宣教活動を行うようになり、教勢を拡大していった。その中で、海外あるいは日本のキリスト教徒の言説が、日本の中に流通するようになった。

明治前期に、ウードブリヂの『教會歴史』1888（明治21）年のようなキリスト教徒の手による「Reformation」に関する体系的な記述がなかったわけではないが¹⁸¹、数として多かったのは、宗教改革者、特にルターについての伝記的な論考であった。既に1876（明治9）年に、中村正直による短いルター伝が書かれていたが、質量ともに充実してくるのは、1880年代末のことである¹⁸²。

1888、89（明治21-22）年には加藤覚『まるてん・るーてん傳』が警醒社から刊行されたが、この著作は、最初の包括的なルターの伝記というだけでなく、万国史や文明史といった通史ではない、独立した「Reformation」に関する記述としても最初期のものであった¹⁸³。

加藤覚は、長老派・改革派の3ミッションが合同で創設した東京一致神学校を卒業後、大阪、広

¹⁷⁹ 同書、579-580頁。

¹⁸⁰ 同書、580頁。

¹⁸¹ ウードブリヂ著、瀬川浅訳『教會歴史 下』米國リフォルムド教會ミッション、1888年。

¹⁸² 徳善「日本におけるルター研究」1967年、76頁；俊野「邦語文献」、147-148頁。

¹⁸³ 加藤覚『まるてん・るーてん傳』警醒社、上巻1888年、下巻1889年。

島、小倉で宣教に携わり、1886(明治19)年に日本基督一致教会に属する品川教会の牧師となった。加藤は1890年に品川教会を去り、ユニテリアンに転じたが、ルターの伝記を出版したのは、品川教会の牧師として活動していた時期である¹⁸⁴。加藤は、「例言」で、ヨーロッパ史を繙ける者は16世紀の「教法改革」を知らないはずはないので、その主唱者であるルターの名前が日本全国に知られるようになったのは不思議ではないと述べている。この時期には、「Reformation」やルターの名はすでに日本でかなりの程度知られていたことが伺える。

加藤は、序文で英語のルターの伝記や宗教改革史の本11冊を挙げており、これらを参考に、ルターの生涯を書き記した。彼は、人民が「教法改革」を求めるようになった時代背景として、醜行を演じたり、世俗的野心を持ち皇帝と争うような相応しくない者が「羅馬法皇」の座に就いており、僧侶は皆「無學懶惰疎暴放逸」であったためだと述べている。そして様々な先駆者がいたにもかかわらず、ルターによって「教法改革」が始まったという¹⁸⁵。加藤は、ルターを「教法改革の主唱者」であり、教法改革の端緒を開き、代表する者として位置づけている¹⁸⁶。

この著作の焦点はルターの生涯にあり、彼の出自や行動、彼をめぐる政治的な動きについての記述が記述の大半を占めている。ただし、その過程で義認論¹⁸⁷、説教の内容の紹介¹⁸⁸、『95ヶ条の提題』の主要な条項¹⁸⁹、主要なルターの著作の内容紹介¹⁹⁰、ルターとツヴィングリの間の聖餐に関する論争など¹⁹¹、彼の神学についてもある程度詳細に説明している。

ルターが行った「Reformation」は、加藤にとって、教皇以外の者が聖書やその他の学説にいたるまで自由に思惟主張することを禁じたり、教皇が学術技芸にいたるまで口を出し、自分に不利なものをみな「禁宗破門」することに対する反抗であった。その結果生じた良心の自由は、様々な自由の根源となり、18、19世紀に開発された様々な自由権利は、ルターたちに由来するという¹⁹²。「Reformation」が、「教法上の改革」だけでなく、良心の自由、学術の進歩、民権自由の精神につながるという加藤の叙述は、本文で自身が述べているように、様々な論者によって既に主張されていたものである。加藤は、こうした説をとる者としてフランスのギゾーの名前を挙げている¹⁹³。冒頭

¹⁸⁴ 加藤の来歴については、以下を参照。「加藤覚」『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、304頁；土屋博政『ユニテリアンと福澤諭吉』慶應義塾大学出版会、2004年、133頁。加藤が属していた日本基督一致教会(1890年に日本基督教会に改称)については以下を参照。小野静雄『日本プロテスタント教会史 上 明治・大正篇』聖恵授産所出版部、1986年、99-116、148-149頁。加藤が牧師の任を務めていた品川教会については、以下を参照。工藤英一『明治期のキリスト教 日本プロテスタント史話』教文館、1979年、55-71頁。

¹⁸⁵ 加藤、8-14頁。

¹⁸⁶ 同書、392-393頁。

¹⁸⁷ 同書、58-59頁。

¹⁸⁸ 同書、86-90頁。

¹⁸⁹ 同書、121-137頁。

¹⁹⁰ 同書、171-179頁。

¹⁹¹ 同書、322-326頁。

¹⁹² 同書、378-380頁。

¹⁹³ 同書、390頁。

で加藤が挙げた11冊の本にギゾーの著書は含まれていなかったにもかかわらず、ここで名前が挙がるところは、日本におけるギゾーの影響力の大きさを示している。

ルターと比べると、カルヴァンを単独で扱った論考の数は乏しかったが、1889(明治22)年には、最初のカルヴァンの伝記『教法改革 かるびん言行録』が刊行された¹⁹⁴。著者のジョン・ロードは、アメリカのアンドーヴァー神学校で神学を学んだ歴史家であり、翻訳されたカルヴァンの伝記は、ロードが様々な場所で行った歴史上の人物に関する講義をまとめた *Beacon Lights of History* という全15巻のシリーズの第6巻の一部である¹⁹⁵。そのため、本文は77頁の小著となっている。訳者の尾島真治は、東京一致神学校を卒業し、牧師となった人物である¹⁹⁶。両者とも、カルヴァンの流れを汲む改革派の信徒ということになる。

この小著は、カルヴァンの生涯を扱っているが、伝記的な記述の分量はそれほど大きな割合を占めているわけではない。これは、加藤によるルター伝との顕著な違いである。その代わりに、カルヴァンの神学(晩餐についての意見や預定説)の説明、礼拝改革や教会政治上の思想、さらには信仰上の違反に対する厳しい態度など、教義や儀礼に関するさまざまな側面について詳細に説明されている。そのために、カルヴァンは、キリスト教の信仰上で大きな功績を上げた人物として称賛されている。彼は、神学者のみならず法律家、宗教改革者でもあり、教会政治を設置し、教会の体系を組織し、礼拝所を改良した点では、ルター以外に比する者がいないという¹⁹⁷。彼の影響は、16、17世紀のフランス、オランダ、スコットランド、イングランド、アメリカの諸学校に及び¹⁹⁸、「プロスビテリアン(長老派)」が開化のために成し遂げたこと、「ピューリタン」がアメリカ国民に与えた基礎の総体は、彼によると評価された¹⁹⁹。

他方、ロードは、カルヴァンを政治上の自由と結びつける、文明史的な評価には否定的な立場を取っていた。カルヴァンは、「共和主義及共和政治的自由の師父の種類」ではないし、民衆への同情心を持っておらず、貴族政治に傾いており、「ゼ子バ(ジュネーブ)」の「政治上の教系」の組織化は彼以前になされていたし、「良心の真正の自由を以て感動せられたる此等の思想家の一人」ではないという。そして、中世のカトリック教会のように異端者を迫害し、セルヴェトゥスを死に追いやったとする²⁰⁰。

¹⁹⁴ ジョン・ロード著、尾島真治訳『教法改革 かるびん言行録』十字屋、1889年。

¹⁹⁵ ロードのプロフィールは以下を参照。Johan Lord, in: George Edwin Rines (ed.), *The Encyclopedia Americana*, Vol. 17, New York/Chicago, 1919, p. 656. 原著は以下の通り。John Lord, *Beacon Lights of History*, Vol.6, New York, 1884, pp. 333-380.

¹⁹⁶ 松江日本基督教会「尾島真治年譜」<https://matsueikai.holy.jp/index.php?尾島真治年譜> (2024年11月19日閲覧)

¹⁹⁷ ロード、2頁。

¹⁹⁸ 同書、60-61頁。

¹⁹⁹ 同書、71-72頁。

²⁰⁰ 同書、62-63頁。

第2節 仏教徒の「Reformation」観

キリスト教禁教の高札が1873年に撤去され、1880年代に入りキリスト教が急速に布教活動を展開すると、仏教側からこれに対抗しようという動きが激しくなった²⁰¹。その中で、排耶書が次々と出版されることとなった。その源流となったのが、齋藤吾一郎が編集兼出版人を勤め、1881（明治14）年に刊行された『耶蘇教國害論』である²⁰²。齋藤の経歴は明らかではないが、自身は「坊主でもなく神主でもなし」と述べている²⁰³。わずか12頁のパンフレットであるこの書で、齋藤は、キリスト教には、「残忍暴虐の悪徳と掠國奪地の詭術」という二つの性質が伴っているという²⁰⁴。その例として十字軍を挙げた後に、「Reformation」にも触れた。彼によれば、1500年代頃「路徳（ルター）」が「宗門改革」の説を唱えたことで、ヨーロッパ中で争乱が起こったという。そして、おそらくは『パーレー万国史』の記述に基づき、この戦争で5千万人が死んだと述べた²⁰⁵。さらに、1572年にはフランスで旧教徒が、10万人の新教徒を殺害したという²⁰⁶。このように齋藤にとって、「宗門改革」とは、ヨーロッパを戦乱に巻き込み、多くの人々を死に追いやった事件であった。

『耶蘇教國害論』のこの記述は、1880年代から90年代にかけて出版された複数の著作で、ほぼそのままのかたちで繰り返されることとなった²⁰⁷。そのため、「Reformation」を多くの人が殺害された、キリスト教の残忍暴虐さを示す典型例だとする理解は、反キリスト教的な仏教徒の間である程度広まっていたと思われる。

さらに井上円了は、笠原芳光によれば、それまでの感情的な排耶論とは異なり、理論的な排耶論を創出しようとした²⁰⁸。井上の排耶論を代表する著作が、『真理金針 初編』1886（明治19）年、『真理金針 続編』1886（明治19）年、『真理金針 続々編』1887（明治20）年である²⁰⁹。井上は、この一連の著作で、キリスト教の教理がいかに道理に合わないかなど、様々な観点からキリスト教批判を行っているが²¹⁰、『真理金針 続編』の中で「Reformation」にも言及をしている。

井上が「Reformation」について、ある程度まとまって記述しているのは、キリスト教が今日まで

²⁰¹ 坂口満宏「1880年代・仏教系の反キリスト教運動—排耶書の普及と結社・講談会活動—」同志社大学人文科学研究所編『排耶論の研究』教文館、1989年、121頁。

²⁰² 齋藤吾一郎編『耶蘇教國害論』齋藤吾一郎、1881年。

²⁰³ 坂口、124頁；齋藤、1丁。

²⁰⁴ 齋藤、1丁。

²⁰⁵ 本稿第2章第1節を参照。

²⁰⁶ 齋藤、2丁。

²⁰⁷ 筆者が把握している著作は以下の通りである。佐々木忠順編『耶蘇教國害漸蹙論』吉田市右エ門、1883年、2丁；玉樹遊楽『佛教覺夢論 初編』洛陽御影堂、1886年、25丁；中村眞龍『愛國破邪要論』東北書院、1887年、10頁；美野田覺念述、田島教恵記『能弁大家覺念居士駁邪演說筆記』法蔵館・興教書院、1892年、52頁。

²⁰⁸ 笠原、197-198頁。

²⁰⁹ 井上円了『真理金針 初編』東洋大学創立100周年記念論文集編纂委員会編『井上円了選集 第3巻』学校法人東洋大学、1987年、7-135頁；井上円了『真理金針 続編』同書、136-249頁；井上円了『真理金針 続々編』同書、250-323頁。

²¹⁰ 『真理金針』三部作におけるキリスト教批判の概要は、以下を参照。笠原、199-214頁。

広がり盛んである理由を説明する部分の中である。彼は、古来の宗教は、「その世間に盛んなるはよく人の情感を感動すべき事跡あるによる。すなわちこれを弘むる者最も多く艱難辛苦をおかしたるときは、人情のこれに感動するありて、その教最もよく世間に行わるるをいう。」と述べた²¹¹。このように井上は、信仰のために迫害を受けた者たちに対し、人々が心を動かされることで、宗教は広まると考えていた。そして、釈迦、孔子、ムハンマドたち他の開祖も多少の艱苦を経験したが、イエスが最も残忍な処刑にかかり、憐憫の情を引きおこしたという。さらに、イエスの弟子たち、ローマ時代の信徒たちも殺戮されたことにより、「人情の感動」を引きおこし、キリスト教が広まったが、「宗教改革」の際も同様のことが起こったと説明する²¹²。

井上は、「宗教改革の乱」は1517年のゲルマンでルターによって始まったという。彼によれば、中世のヨーロッパでは「ローマ法王の威権はなほだ盛んにして、その分限外に及ぼし、不正不法のゆえんある」と、ローマ教皇が自らの権力の大きさを濫用し、不正不法を行っていたとした²¹³。そして、中世以来教皇に対し異説を唱える者たちがいたが、16世紀の初期に「宗教改革の論」を唱える者たち、つまり「新教者」が群れを成して登場し、教皇に抗論したという。ルター以外に、スイスではツヴィングリも現れ、これによって新教徒は互いに結束して旧教者（カトリック）に対抗し、ヨーロッパ全州の大騒乱となり、30年争いが続いたが、1552年にはじめて一度沈静化され、「独立の新教」をドイツで公布するに至ったという²¹⁴。井上はさらに、ルターやツヴィングリ以外に、カルヴァンの一派、さらにイギリス国教会やピューリタンが登場したことを概略したあと、新旧両派が互いに熱血を注いだことに対し「ああ、だれかその精神に感ぜざる者あらんや。」と述べ、キリスト教が今日も繁栄しているのは、数百年、数十万の生き血を流して得た結果だと主張した²¹⁵。このように井上は、齋藤と同様に、「宗教改革」が争いを引きおこし、多くの人々の血を流す結果になったことを強調していたが、そのことがキリスト教が繁栄している理由だと見なした。

『真理金針 続編』の中では、さらにキリスト教と開明の関係を検討する中で、「Reformation」にも触れている。第1章2節で見たように、明治期には、キリスト教は西洋の文明化を推し進めたという考え方が広まっており、中には日本においても西洋同様の文明化を成し遂げるために、キリスト教を受け入れることが必要だという論者もいた。井上は、こうした論に反論するために、キリスト教は「妄信を振起し、社会の開明を妨害せしのみにて、すこしもこれを助けたることなく」と述べ、今日の文明はキリスト教ではなく、以下の9つの事情によって生じたと主張した。その9つとは、「十字軍の結果」、「サラセン人種の侵入」、「古文学の再興」、「印刷術の発明」、「アメリカの発見」、「インドの航海」、「封建制の破壊」、「宗教の改革」、「理学の新説」である²¹⁶。西洋の開明を引きおこした

²¹¹ 井上『真理金針 続編』204頁。

²¹² 同書、204-207頁。

²¹³ 同書、206頁。

²¹⁴ 同書、206-207頁。

²¹⁵ 同書、207頁。

²¹⁶ 同書、240頁。

事情の中に「宗教の改革」も入っているが、井上はここでは短く「宗教の改革とは、1517年ルーテル氏新教を唱えたる争乱をいう。」とのみ説明している²¹⁷。

井上は、この9つの中で「宗教改革」以外はキリスト教の外で起こったこと、さらに「宗教改革」も、「当時世間の事情、開明の精神」が勢いを増し、世間で文明が起っていたのに応じて、ルターたちが改良をその上に施しただけで、文明がキリスト教自体から発生したわけではないという²¹⁸。彼によれば、「中古の妄信」がキリスト教から生み出されたものであり、キリスト教自体は文明には害となり、近世の「宗教改革の乱」が生じてからは、中世のように害毒を社会の上に流さなくなったが、今日も人民の自由を妨げ、学者の思想を害するなど、文化の妨害をするという性質がなくなったわけではなかった²¹⁹。このように井上は、キリスト教の本質は中世のように妄信を生み出し、文明に害を為すものであり、「宗教改革」は西洋の文明化に貢献したものの、それはキリスト教の中ではなく、外からもたらされたものだと主張した。

おわりに

最後に、明治前期の様々な種類の著作から浮かび上がってきた「Reformation」観を明らかにする。その際、「Reformation」が、「ビリーフ」の改革だと理解されていたか、「文明」と結びつきが見られたかに焦点を当てる。

一点目については、明治前期に「Reformation」が「ビリーフ」の改革だと見なされていたとは言いがたい。この時期の著作では、当然贖宥や聖餐論、聖書主義など「ビリーフ」の改革についても触れられていたが、カトリックの煩雑な儀式が簡素になったり、聖職者が結婚するなどの「プラクティス」の改革についても言及されていた。教義が、儀式や宗教的慣習よりも重視されているようには思われず、その意味では、「Reformation」は、「ビリーフ中心主義」的というよりも、「ビリーフ」「プラクティス」両面の改革だとして描かれていたと言える。

しかし、この時期の大半の著作では、そもそも教義や儀式については簡潔にしか触れられていなかった。改革者の教えや儀式の改革を詳細に説明した著作が日本語で読めるようになるのは、ウードブリヂ、加藤やロードなどのキリスト教徒による著作が刊行された1880年代末であった。つまり、「宗教改革」という訳語が主流になる1880年代半ばまでの時期には、日本語では万国史や文明史などに出てくる簡潔な説明でしか、改革者たちの教えや儀式の改革について知ることが出来なかったことになる。

二点目については、「Reformation」は、明確に文明と結びつけられて語られていた。特に文明史の著作でこうした見方が顕著であったが、フィッシャーやスウィントンによる万国史や加藤覚によるルターの伝記でも、同様の見方が現れていた。ロードはカルヴァンと政治上の自由を結びつける

²¹⁷ 同書、241頁。

²¹⁸ 同書、241-242頁。

²¹⁹ 同書、242頁。

ことに批判的だったし、井上円了はこの説に強い反論を加えたが、これは、この時期には「Reformation」あるいはプロテスタントと文明の進歩が強く結びつけられていたことを前提としたものである。個々の著作で盛り込まれる要素は異なるが、この時期の著作から見て取れる図式は概ね以下のようなものであった。中世においてヨーロッパの人びとは野蛮で無知であったため、それに伴いカトリック教会の教えや儀式も迷信的であった。聖職者は腐敗堕落しており、ローマ教皇は絶大な権力を持つ暴君であったため、人々の信仰や知的自由を抑圧していた。しかし、中世後期に人智が発達することでこれに対する批判が高まり、ルターによるカトリック教会・教皇批判を契機として、自由を求める声がヨーロッパ各地で上がり、「Reformation」が生じた。その結果プロテスタント諸国で思想・信仰の自由、学術、さらには政治的な自由といった文明が進歩したという。

以上の検討から、「ビリーフ」「プラクティス」の改革という側面が無視されていなかったにせよ、明治前期において「Reformation」は、主に西洋文明の進歩を引き起こした歴史的事件として理解されていたと結論づけられる。

このことは、「Reformation」の訳語には、当初から「religion」の訳語が含まれていた理由をも明らかにする。明治前期の知識人は、「religion」が「信仰や礼拝の体系」であるということを理解しつつも、文明、学術と結びつくかどうかをその条件として重視していた。彼らの主要な関心事は、日本を西洋のように文明化することにあつたため、「religion」という新たな概念を受容する際に、文明化への貢献という側面を重視したのは当然と言える。「religion」と文明・学術の進歩を結びつけるという語り方は、日本での布教を進めるために魅力的な語り方を求めたキリスト教徒、それに対抗する必要があつた仏教徒にも共有されていた。そして、「Reformation」は、まさしく西洋で支配的な「religion」であるプロテスタントが、西洋文明を進歩させた出来事だと理解されていた。それ故、「Reformation」の訳語「宗教改革」に含まれた「宗教」は、「信仰と礼拝の体系」としての「religion」というよりも、文明・学術の進歩を促すものとしての「religion」を意味していたと考えられる。

上記二点以外で浮かび上がった特徴として、「Reformation」は、ヨーロッパ各国の王侯貴族が中心となって生じた政治的な争いや交渉、制度の改革として描かれていたことが挙げられる。この傾向は、万国史で特に顕著であった。万国史は基本的に一国史の集合であり、そこでは王侯貴族の政治・外交・戦争を中心に記述されるため、「Reformation」についても同様に政治的側面に焦点が当てられて記述されたのであろう。出版点数を考えても、当時の日本人の多くは、万国史を通じて「Reformation」について知ることになった可能性が高い。その際、「Reformation」によって起こった争いで、多くの犠牲者が出たことについては、万国史、文明史、仏教徒による排耶論的著作全てで強調されていた。また、国家が教皇の圧政から脱したことも、歴史的に重要だと述べられていた。そのため、明治前期においては、多くの日本人は主に「Reformation」の政治的側面についての記述を読んでいたことになる。

もう一つの特徴として、ルターやドイツ中心主義が挙げられる。全ての著作で「Reformation」

は、ドイツでルターが始めた出来事として説明されていたし、多くの著作で、ドイツから他のヨーロッパ諸国に広がっていったと述べられていた。ルター派以外に、ツヴィングリ派、カルヴァン派、イングランド国教会、ピューリタンや長老派などプロテスタントの中にも様々な教会が存在しており、教えや儀式に違いがあったこと、ツヴィングリやカルヴァンなどルター以外の改革者についても言及されていた。特にカルヴァン、カルヴァン派については、言及している著作も多く、フィッシャーのように、その影響の大きさを強調する論者もあり、ロードによる伝記も翻訳されるなど、ある程度は重要性を認識されていたようである。ただし、カルヴァンは、ルターのように全ての著作で言及されているわけではなく、記述の分量もルターと比べると大幅に少なかった。伝記の数にも大きな差があり、ルターほどの存在感があったとは言えない。カルヴァンについての記述で興味深いのは、彼がジュネーヴで反三位一体論者のセルヴェトゥスを火刑にさせたことが多くの著作で言及されていることである。この時期は「Reformation」に起因する政治的争いとその犠牲者に対する人々の関心が高かったが、この事件は、プロテスタントによる自由の抑圧・迫害の例として大きな注目を集めていたように思われる。また、西村やホワイトは、「アナバプティスト」のトーマス・ミュンツァー、ミュンスター再洗礼派の指導者ヤン・ファン・ライデン、「アレイオス派」のセルヴェトゥスのような「Reformation」から生まれた急進派についても言及しており、既に明治前期には、彼らについての紹介が始まっていたことが分かる。

今回検討した著作では、近世のカトリック動向についての記述は全体的に乏しかった。プロテスタントによる「Reformation」と比べると、重要視されていなかったことが伺える。これに触れた文献での描き方は、対照的なものであった。西村茂樹とフィッシャーは、近世のカトリック教会は、トレント公会議やイエズス会を通じて、プロテスタントに抵抗し、勢力を挽回したと説明し、フィッシャーはこれを「カソリック反動」と呼んでいた。それに対しホワイトは、トレント公会議の様々な決議によって、中世カトリック教会の墮落が改革されたと肯定的に評価し、これを「カトリックレホルメーション」と称した。近世カトリックの動向、それを表す概念ともに、この時期には一致した考えはなかったことが分かる。

以上の検討で、「宗教改革」概念成立期である明治前期の「Reformation」観が明らかになったが、残された課題は多い。明治前期の「Reformation」観は、この時期の「religion」理解と合致したものであったが、明治後期に入ると「religion」概念は、次第に文明や学術といった他の概念との結びつきを弱めていき、自立した領域として理解されるようになったことが先行研究で指摘されている²²⁰。「religion」概念の内実の変化が、「Reformation」観に影響を及ぼしたかについても検証が必要である。また、「宗教改革」概念を、近世のキリスト教以外の「宗教」、特に仏教の改革を示すため

²²⁰ 山口、161-179; 島蘭進「宗教言説の形成と近代的個人の主体性—内村鑑三と清沢満之の宗教論と普遍的超越性」『季刊日本思想史』72、2008年、32-52頁。

に使うという用法も既に明治期の間に生じた²²¹。「宗教改革」概念が、「Reformation」の訳語という枠を越えて、どのように拡大されて使われたかを明らかにすることは、日本語の「宗教改革」という概念の再検討のために不可欠であろう。

²²¹ 小笠原眞「西と東の宗教改革—特に「日本の宗教改革＝鎌倉仏教」説の検討」『愛知学院大学文学部紀要』35、2005年、121-137頁。